

PAC分析の適用範囲と実施法

内藤 哲雄

How to Use PAC Analysis

Tetsuo Naito

はじめに

PAC分析のPACは、**Personal Attitude Construct**（個人別態度構造）の略称であり、“バック”と発音される。現在では、利用の仕方によっては、認知やイメージの構造、心理的場、アンビバレンツ、コンプレックスまで測定できることが確認されているが、その名称の由来が示すように、元々は個人別に態度構造を測定するために筆者（内藤，1993a）によって開発されたものである。この分析法は、当該テーマに関する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。

筆者が「個」へのアプローチに着目しPAC分析の技法を創案した背景には、学部専門課程・大学院在学中とその後の数年間（合計13年間）を実験社会心理学を主専攻とした後に、6年6カ月にわたって臨床心理学担当の専任の職に就き、再び元来の専門分野である社会心理学の講座を担当するようになったという経緯がある。前職では臨床心理学が表看板であり、そのため児童相談所での臨床実務にも従事していたのではあるが、「本当の専門は社会心理学なのだ」との思いを持ち続け、社会心理学と臨床心理学の研究発表を並行的に続けていた。「二足の草鞋を履く」との意識が消えることなく（そのように割り切っていたのかも知れない）、筆者の中でそれぞれが別々の抽斗に収納され、2つの専門分野の視点やアプローチの違いに矛盾を感じることもなかった。それが現在の職場に異動し、再び社会心理学を表看板とするようになったのではあるが、喜び勇んで臨床心理学を放擲するという訳にはいかなかった。もはや拭い去り難いほどに臨床心理学的な発想や感性が染み着いてしまっていた。看板は年月を経て裏も表も区別がつかないほどに日焼けし、変質していた。我と我が身の中で、2つの抽斗が同時に開け放たれてしまい、矛と盾のように鋭く対峙して、葛藤し渦を巻き始めた。すなわち、臨床の現場で、それぞれに独自の問題や個性を持つ子供たちを療育し、親のカウンセリングを続けてきた後では、抽象的・平均値的な人間を描き続ける今日の社会心理学の態勢に、疑問を感じざるを得なかった。馴染みのあるはずの社会心理学の、どの教科書を読んでも、しっくりとしないのである。「社会心理学講座担当者」としてのアイデンティティによって自身を説得し割り切ろうとしても、「今ここに生きている実在の人間」「私やあなたという『個』」が欠落しているという実感を拭い去ることができなかった。

こうして、臨床においてカウンセリングが何ひとつ手に持たずに個別の対象や現象に肉薄するように、社会心理学でも個別の対象や現象に鋭く迫ることができないだろうか、と考えるようになった。しかも、技術の習得に時間がかかり、理論的視点や主観が関与しやすい従来の臨床心理学の方法とは異なった、操作的で客観的で簡便な技法を開発できないだろうかと感じた。そのとき、かつて大学院の学生時代に感じていた「個人独自の態度構造」を捉えようとの思いが蘇った。臨床の実践においてそうであるように、被験者は1名でよいのだ、平均値も分散も必須要件ではないのだ、繰り返しデータはいらない。個人や単一集団の独自性や特有性、個のもつ豊饒を分析したい。しかも個々の要因分析ではなく、全体構造を捉えたい。これができれば長期間にわたる従来のいわゆる事例研究法の呪縛から、個性記述的研究を解放できる。膨大な変数が総合的に関与する事例の、操作的科学的な研究への道を開くことができる。そう感じた。何がなんでも技法を開発せずにはおられないという気持ちになった。こうしてPAC分析の技法開発に着手することになり、関連技法との比較を含めた理論的考察が続いた（開発の経緯や当初の成果については、内藤（1993a）を参照されたい）。

技法の開発と洗練、実証研究の学会等での発表は1991年に開始されたが、はじめの頃は興味を示される方々はいても、明確に理解したうえで支持する反応はほとんどなかった。筆者自身がいまだ全貌をつかんでおらず、直感に促されて探索的に研究していた段階である。現在から振り返れば当然のこととして納得できるが、当時は、無視されているとか、傍観されているといった状況に近いものを感じていた。その後いくつかの実験を重ね、理論的に論考した論文『個人別態度構造の分析について』（内藤、1993a）を発表した際には、強力な支持者が現れたが、少数であった。「少数派」の「多数派」への影響力について実証研究を積み重ね、「多数派の影響力」に固執する学会の「多数派」に対して十年を越える訴求を続けたMoscoviciの心境にわが身を重ねる思いであった。ところが、日本グループ・ダイナミックス学会の機関誌「実験社会心理学研究」に『学級風土の事例記述的クラスター分析』（内藤、1993c）と『性の欲求と行動の個人別態度構造分析』（内藤、1994）の2論文が掲載されたことを転機として、理論と技法に興味を持つだけでなく、利用を希望する研究者が出現し始めた。技法の実際を習得しようとする研究者が、筆者に連絡を取り、勤務先にまで訪ねてくるようになった。また、各地の研究会や琉球大学の公開講座で、研究概要の発表とか技法習得のためのワークショップが開催された。対象者は、社会心理学、臨床心理学、社会学、日本語・異文化間教育の研究者、教育現場の教員が中心であった。

研究概要の発表では、なぜ「個」を研究するのか、それが普遍的（多人数による平均値的）研究とどう繋がるのかといった、「個」へのアプローチの意義が論議の中心となるので、技法実施の実際についてはそれほど問題とならない。技法そのものが中心課題となるのはワークショップにおいてである。個人にあるいは集団に対して、1泊2日とか2泊3日を費やして「PAC分析の実際」の説明を繰り返しているうちに、当初私が予想していた以上に、技法の詳細を伝達するのが難しいと感じ始めた。技法の中に実験社会心理学的アプローチと臨床心理学的アプローチが融合されていること、換言すれば、操作的・実験的・（記述）統計学的手法と、間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法の両者が包含されていることが、通常はいずれか一方のみの知識や経験しか持っていない研究者への伝達を困難に

していたのである。他方では、いずれのアプローチの体験も不十分な初心者への説明という問題もでてきた。公刊された内藤の論文を頼りに卒業論文や修士論文の研究で使用したが、「技法の詳細がわからなかった」との声も聞こえてくるようになった。さらに、最近ではPAC分析の利用者が、社会心理学や心理学の範囲を越えて拡大しつつある。開発者としては誠にありがたいことではあるが、喜んでばかりもいられない。

上記のような切羽詰まったともいえる事情から、本論文では技法実施の実際を紹介することに焦点を絞り、最新の成果を説明することを主目的とする。PAC分析の理論と技法の全貌に興味を持たれた方は、開発当初に執筆されたもので不十分な点もあるが、比較的まとまった論文である『個人別態度構造の分析について』（内藤，1993a）によって補完していただきたい。

なお、あらかじめお断りしておくが、「個」へのアプローチの価値を論述する際に、いわゆる法則定立的研究に対して、挑戦的ともいえる表現を用いることがある。しかし、いうまでもないことだが、「個」へのアプローチが法則定立的研究に取って代わることができるか、すべての面で優れているというつもりはない。筆者の研究者としての出発点は実験社会心理学であり、平均値と分散を中心とした推測統計学や記述統計学を多用した経験を持っている。また、現在でも指導している学生の研究はほとんどが、1セルあたり10名を越える被験者をもつ実験的研究であり、結果の分析には平均値による差の検定を多用している。それゆえ、集団（としての分布）データによる解析、比率や平均値による群間の差の検定（推測統計学）の価値は十二分に体感している。集団の平均・分散による分析と個の質的・記述的な分析は、車の両輪のような相互補完的關係にある。2つのアプローチを対置させることで、現実の人間行動を幅広く相対化してみることができるといえよう。それにもかかわらず、前者のみが強調され、それだけが科学であるかのように信じ込まれている風潮を憂い、また後者の操作的・科学的な技法の開発とそれを支える理論の創出が蔑ろにされ、遅滞していることを実感するがゆえに、後者のアプローチの有用性を強調し、声を大にして提唱するものである。

I 「個」へのアプローチとPAC分析

1 「個」へのアプローチの意義

心理学的な接近法をとる社会心理学（いわゆる心理学的社会心理学）を含めて、心理学では、人々が現実に経験する内容を対象としており、人々の実際の反応を収集し、個人内のメカニズムを解明することを目指している。解明されるべきものは、個人の認知・感情・行動である。状況要因を用いて説明する場合であっても、最終的にはそれが（普遍的・抽象的・平均値的なものであるにしても）1個人に及ぼす影響に還元される。法則定立的な研究法とされる集団での実験や調査で描き出されるのは、平均値としての人間（行動）である。平均値的な人間像はすべての人々を代表する「**普遍**」であり、個々の人々は普遍を具体化する「**特殊**」とみなされる。それでは、心理臨床などで問題とされる「**特定の具体的な個人**」は上記の意味での「**特殊**」であるから、その人の行動の全ては「**普遍**」である平均値的な人間の行動という観点から説明され得る、と結論できるのかということ、そう単純ではない。

(1) 決定因の問題

第1に問題となるのは、ある変数で群間の平均値に有意差が見いだされれば、その変数は普遍的であるとともに、「決定因である」と錯覚してしまうことである。ところが、測定された変数の分散説明率だけでは、決定因であるか否かを結論することができない。測定される変数が行動事象の決定因と考えられる変数そのものによって構成されていなければ、有意差を得た変数が決定因であるとはいえない。たとえ決定因が含まれていたとしても、優位度の低いものであったり、相互に影響する複数の重要な決定因の一部が欠けているならば、問題となる行動事象の全体に迫ることができない。

心理学が生きた人間を対象とし、特定個人の具体的行動を説明する理論や法則を得ることを目指すのなら、日常的生活者としての特定人物の具体（特殊）行動を説明できるものでなければならない。しかも、真空状態のように極端に統制された実験室でしか妥当しない法則ではなく、個性をもちながら生活する人々の生活場面での具体行動を左右する決定因を含む法則や理論を構築しなければならない。ところが、これまでの心理学の研究の中で、上記の核心に込め得るものはそれほど多くはない。否、少ないとか、僅かであるというべきであろう。その原因として考えられる最大のものの一つが、日常生活者としての個々の人々をつぶさに観察し、生活行動の決定因を探索する努力を軽視してきたことであるといえよう。そして、「決定因の集合」を見いだすためには人間行動を全体として眺めることが必要であるにもかかわらず、生活行動を微細な単位行動の集積と考え、微細な行動を説明するための変数を事細かに分析しがちであったといえよう。少なくとも心理学においては、行動の単位を、「膝を曲げる行動」「足首を動かす行動」から、「歩く行動」→「散歩」→「悲しみを紛らすための彷徨」というように、より大きな括りとして捉えることが求められよう。これらは、人間を「自身の行動を意味づける存在」と見なし、個人を全体的に捉えようとするホリスティック（holistic）な観点を採用し、対象者の内的な世界を間主観的（intersubjective）に理解しようとする方法、と読み換えることができる。質的に事例を詳細に分析する研究法が、集団の平均値的研究法（いわゆる法則定立的研究法）を補完する価値を持つという根拠の一つがここにある。

(2) 独自性の問題

人間には、①全ての人に共通する部分、②一群の人々にのみ共通する部分、③その人独自に存在する部分の3つがある。①と②は共通特性であり、③は個人特性である。そして個人における独自性には、③だけではなく、①②③の統合形態としての（言葉の定義からはこちらが本来的な）独自性も含まれる。なぜなら、①と②の組み合わせは、共通特性のみの組み合わせであるから、同一の組み合わせ（同類者）が複数存在することが論理的に帰結されるが、③をも包含する全体構造はただ一人にしか存在しないからである。統合的形態においては、他者と共通する可能性は、③の内容とは拘わりのない、③を生成するメカニズムにおける共通性しか存在しないということになる。ホリスティックなアプローチでのホリスティックの範囲を拡張していくと、特定の内容をもつ具現者はただ一人しか実在しないことになり、共通性はメカニズムに限定されてくる。人間科学が、ホリスティックな観点を採用し、それを押し進めるのならば、結果として単一事例にのみ適合する普遍性の解明をも目指すこ

とになる。この単一事例における普遍性を、**個別的普遍性**と呼ぼう。他方、メカニズムに注目するならば、「個」においても共通性としての普遍性が存在する可能性がある。こちらは**独自の個における共通の普遍性**と呼ぶことにしよう。例をあげるならば、この種の共通の普遍性に対応するのが、“条件づけの原理”であり、個別的普遍性に対応するのが、多種多様な状況下での条件づけが継続され、ついには一個人しか該当者がいない“独自の習慣行動を獲得した個人”ということになる。ところが、人間は社会的存在であることから、独自の習慣行動も、その構成要素の大部分は彼が所属する集団の文化や規範に規定されたものである。

以上の論考によって、特定個人における共通の普遍性の全体は、「全ての人」と「その人を含む一群の人々」に共通する内容、「全ての人」と「その人を含む一群の人々」に共通するメカニズムであり、これらがその人の独自性の全体集合のかんりの部分を構成していると考えられる、ということになる。それゆえ、特定個人を詳細に分析することは、個別的普遍性だけでなく、共通の普遍性の解明をも目指すことになるのである。

吉田（1990）の提言を継承した伊藤（1996）は、教育心理学を舞台として、人間を、**主体的、独自の、創造的、歴史的、社会的、超越者的、全体的**、な存在としての「学習者」として意味づけている。そして一見すると厳密に見える実験的方法には限界があり、人間科学の活路を、「個」の内界に迫る臨床心理学的な事例研究法に求めるべきだと主張する。そして、論文の本題最終部分に、「蛇足であるが」と言い置いて、以下のように締め括っている（p135.）。

類似の「問題」（例えば、夜尿癖とか、弱いものいじめ）の事例を沢山、研究していけば、やがて普遍的な理論（夜尿癖に対する操作の仕方とか、弱いものいじめの対策）が生まれることもあるが、そのことで事例研究の価値があるとするのは、偏狭すぎる。「操作法」に固執する研究者がその価値のみを認めることがあるが、真の事例研究は、一回一回の、また一人一人の事例に「普遍性」を見出すことにその生命がある。いいかえると、一例をもって、人間一般に共通する原理を集約することができる、ということである。個人の世界において、その「個」の本質を明らかにすればするほど、「人間の本質は何か」という主題への普遍性が得られるし、真の教育の価値も解明されるというのは、人間の本質と教育は、自然科学の対象ではなく、人間科学の主題であることを物語っている、といえないだろうか。

伊藤に倣い、「蛇足になるであろうが」と前置きして、例示しながら論考を続けよう。太陽系の惑星には、水星、金星、地球、火星、木星、土星などがある。これらの惑星間で、水素、酸素、炭素などの各成分を測定し、平均値を算出したとする。あらゆる成分を測定して平均値化した惑星というものが存在するであろうか。実在しない。ここで地球に注目してみよう。地球のような水や空気が存在する他の惑星は、少なくとも太陽系には存在しない。そして地球には、太陽系の他の惑星には存在しない生態系を含む多種多様なシステムが実在する。筆者は、掛け替えのない地球に棲む一人として、豊かな地球独自のシステムを解明する必要性を感じる。換言するならば、「個」の**存在価値**を認めるか否かが、「個の独自性」を解明する価値を左右するということになる。「私」を「あなた」を、生きている一人ひとりの価値を真摯に受けとめるか否かが、人間の、人間集団の「個」の研究意義を決定するのであ

る。多数であること、平均的な人間観や集団観だけが科学を支えるという主張には賛同できない。そして、ただ一つの地球だけでの現象解明から、宇宙にロケットを飛ばし、月に旅することができたように、一人のまた単一集団の「個」の中には、全ての人間にまた全ての集団に共通する原理が包含されていると考えられるのである。

次に、ホリスティックなアプローチの価値を別の例で示そう。学習心理学において、レスポナント条件づけ、オペラント条件づけ、モデリングなどの機制が明らかにされてきた。これが人間行動の解明に貢献し、行動療法などの実践にも多大の貢献をしてきたのは事実である。しかしながら、肝心な点が研究されずに放置されている。もし人間の行動形成変容の「全体としてのメカニズム」へと目を転じるならば、レスポナント条件づけ、オペラント条件づけ、モデリングのそれぞれの機制が、一人の人間の中でどのように統合されているかが明らかにされるべきだということになろう。ここで事例を取りあげよう。パソコンで新しいソフトを学習する場面を想像してもらいたい。Aさんは、しばらくキーボードに触れていたが、すぐに不機嫌になり、二度と触りたくないと感じるようになったとする。レスポナント条件づけタイプに該当する。Bさんは、めっちゃくちゃにキーボードを叩いていたが、やがて適切なパターンを学習していった。これがオペラント条件づけタイプである。Cさんは、マニュアルを読みながら、また熟練者に教えてもらいながら、習得していった。モデリングタイプである。Aさん、Bさん、Cさんのような事例は、身近に観察することができる。これらの例は、行動形成の全体機制にはいくつかのタイプが存在することを示唆している。同一個人内でも、得意領域、不得意領域でどの下位機制が優位となるかが異なるであろう。全体的（ホリスティック）な行動形成システムの研究が必要であるにもかかわらず、研究はほとんど進んでいない。

さて、社会心理学者としての存在でもある私には、上記の論考に補足しておくべきことがある。それは、集団研究についてである。集団のレベルにおいても、「個」の解明が必要である。すなわち、「個別集団」へのアプローチである。筆者が、「個人」へのアプローチではなく、「個」へのアプローチと呼ぶ所以である。本論文では、残念ながら個別集団研究についての考察を大々的に進める余裕がないので、別の機会としたい。PAC分析によってもアプローチ可能な部分がある。興味を持たれた方は、『個人別態度構造の分析について』（内藤、1993a）と『学級風土の事例記述的クラスター分析』（内藤、1993c）をお読みいただきたい。

以上の論述によって、①生活する個々人や彼らに関与する個々の集団を研究対象とすること、②実存する個人や個別集団に掛け替えのない価値を認めること、③全体としての「個」に事例記述的に迫ること、の意義が明らかにされたであろう。そして、普遍性には個別的普遍性と共通の普遍性の2種が存在し、共通変数に迫るいわゆる法則定立的研究法を補完する「個」へのアプローチによって、2種の普遍性のいずれの解明にも寄与できることが理解できたといえよう。

2 PAC分析の下位技法とそれらの利点

本論文の最初に記述したように、PAC分析は、①当該テーマに関する自由連想（アクセス）、②連想項目間の類似度評定、③類似度距離行列によるクラスター分析、④被験者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、⑤実験者による総合的解釈を通じて、個人ごと

に態度やイメージの構造を測定・分析する方法である。これらの作業手続きに沿って、本技法の利点を明らかにしよう。

(1) 自由連想

広く知られているように、自由連想は、精神分析の創始者 Freud によって、患者の潜在意識を探索し治療するために利用されるようになった。また、Jung は精神医学的診断に利用可能な一連の連想刺激群を発見し、連想の内容だけでなく、反応時間によって数量的に分析する方法を開発したことで Freud と出会い、その後独自に精神分析理論を創始する礎を得た。

近年では、認知科学の分野を中心として、自由連想は新たに“アクセス (access)”として再概念化され、長期記憶から検索される情報の構造や機能が検討されてきた。社会心理学においても、対人認知などの研究に適用されてきたが、最近では「社会的カテゴリー化理論」での内集団・外集団のカテゴリー認知や、社会的アイデンティティのイメージを決定するものとして注目されている (Turner, J.C., 1987; 内藤, 1996)。

上記の諸研究が示すように、自由連想 (アクセス) は、個人内の、コンプレックス等の潜在的構造、認知的枠組み (スキーマ、スクリプト等)、社会集団のカテゴリー認知といったものの、構造と機能を探るための素材を得る重要な技法とみなすことができる。PAC 分析は、自由連想のこうした特長に注目したのであるが、さらに研究方法論的には次のような意味を持っている。

多くの研究者 (実験調査者) は、被験者 (調査対象者) のイメージや認知構造を測定しようとするとき、**研究者自身のスキーマ (ものの見方)** に基づいて変数を決定している。いわば、自身と同じ構造や機能を持つ者を同定するかのような、あるいは自己のイメージに適合する現象を確認する作業に従事しているかのような観がある。このような批判に対して、事前に深層面接 (depth interview) や自由記述で調査してから変数を決定した場合には反論があるであろう。しかし、その場合でも、調査対象者に共通する変数に限定され、絞り込まれることになる。全員の全ての変数 (回答) を取り上げるとしたら、ある人にとっては重要なアクセス項目であるのに、別の人にとってはアクセスされない項目ということがあり、いずれの対象者においても通常はアクセスされない項目への反応を求めることになるし、膨大な項目数となるからである。

他方、個人の自由連想によって個人別に分析するという場合には、**被験者自身のスキーマ** という枠組み (フィルター) を通して抽出された変数 (連想項目) を採用することになる。別の視点から見れば、被験者一人ひとりのための独自の実験調査項目を作成する方法であるともいえる。

それぞれの被験者に誘発される認知・イメージ構造は、それぞれの人においてアクセスされる項目からなる、相互に影響され分割できない全体的・統合的構造であると考えられる。したがって、例えばスキーマにおいては、その定義を「集団における共通変数としての認知的枠組み」へと変更しない限り、各被験者ごとに測定すべきだということになる。ステレオタイプ研究においては、個人別に対象集団へのスキーマを測定して、同様のスキーマが多くの人々に共通して出現することが確認されたときにはじめて、社会的ステレオタイプが存在

しているといえるのである。

以上のように、変数が被験者自身のスキーマによって決定されるときに、本質的な意味での、被験者独自のスキーマの構造が解明されることになるといえよう。被験者自身のスキーマに基づく変数を取り出す有力な方法の一つが、自由連想（アクセス）という技法である。そして自由連想法は、人間の持つ豊かなイメージ能力に支えられ、あらゆる対象に適用できるという性質を持っている。

(2) 連想項目間の類似度評定

被験者が1名の場合の項目間の類似度得点については、項目への回答を繰り返させることで平均値と分散を得て、相関係数等を算出する方法がある。身長や体重のように、繰り返しの測定が可能で、緩やかに変化する安定した変数の場合に適している。

他方では、いきなり項目間の類似度を評定させる手続きを考えることができる。状況変化や体験の繰り返しの応じて時々刻々と変化するという特徴を持つ自由連想（アクセス）等では、こちらの方が適している。またこの方法では、例えば初めての就職や初めての性体験のように、ただ一度しか体験せず、繰り返すことが不可能な事象にも適用できる。

なお、PAC分析では、評定される類似度は、言語的・辞書的な意味によらず、直感に基づくのが原則である。この根拠はJungのコンプレックスの概念などに求めることができるが、それよりも筆者自身の臨床実務の体験から得たもので、連想項目間の類似度は、「①辞書的意味」だけでなく、またそれよりも、「②個人的経験の内容」、「③感情（コンプレックス）」等によって、またそれら①②③の複合によって決定されていると考えるからである。ただし、言語学などで、個人内における辞書的意味の構造を検討・研究することを否定するものではない。辞書的意味よりも直感を重視するのは、個人的体験や感情の成分の大きい態度やイメージの構造を探求することを目指すことによるものであり、心理学的な側面への傾斜によるものである。かなりの数のPAC分析をした筆者の経験によっても、「直感的イメージ上での類似度」が有効であると感じている。

(3) 類似度距離行列とクラスター分析

全項目間の類似度得点を一覧表にすると、類似度距離行列が完成する。ただ一人の、しかも繰り返しのない、平均値も分散もないデータでありながらも、この距離行列によって多次元解析(MDS)やクラスター分析が可能である。類例がないことではあるが、理論的に間違いがないことを確認し、筆者は愕然とした！ただ1名のデータなのに、平均値も分散もないのに（項目においては得点すらなく、存在するのは項目間関係の得点のみである）、記述統計学を利用できるのだ！「平均値」「分散」「推計学(確率を利用した推測統計学)」だけが統計学であるかのように錯覚し、信じ込んでいた自身に気づいた。繰り返すことのできない体験、個人は独自の存在という側面をもっているのに、「平均値」「共通性」にこそ真実があり、科学の目指すものである、との通説を鵜呑みにしていた。何ということであろう！

ここにおいて、われわれは、「個」の豊饒の世界を探求し、操作的に解明するための第2の道具を得たのである。筆者は構造の析出に際して、多次元解析ではなくクラスター分析を用いているが、これは項目群のまとまり（すなわちクラスター）を決定しやすいし、統計デ

ータを見慣れていない被験者にとっては、相対的な距離を配慮しないですみ、項目群から喚起されるイメージやまとまった理由を探索しやすいからである。いうまでもないが、クラスター分析以外の多変量解析（多次元解析を含めて）の利用や併用を否定するものではない。

ところで、KJ法に代表されるように、連想項目のカードを直接に2次元の平面（台紙）に分類しながら、カテゴリー及びカテゴリー間の位置関係を決定する方法がある。簡便さという点ですぐれているが、カードをカテゴリーに分類するとき、すでにくつか集まったカード群のイメージ（構成概念らしきもの）に影響されて残りのカードを帰属させてしまう傾向がある。またカテゴリー間の距離や結合については、さらに意識的・論理的に決定される可能性が高い。これに対して、類似度距離行列によってクラスターの結節を算出する場合には、結果を予測して類似度評定をすることは不可能に近い。（組織的に収集されたデータはないけれども、筆者が実施したPAC分析の被験者では、析出結果を見る前には、クラスター構造に気づいていたとしてもぼんやりとあるいは一部についてだけであった。）

クラスター間の最終結合までの全過程（すなわち構造の析出）が、項目間類似度を被験者自身が「感じること」に基づいて決定されるという点は、心理臨床においてはとりわけ重要な意味を持つ。カウンセリングやイメージ療法において、クライアント自身が内界を「感じる」ことが成功に導きやすい（池見，1995）ことが知られているからである。

(4) 被験者による解釈・イメージの報告

当該被験者から、各クラスターによって喚起されるイメージ、項目群がそれぞれにまとまった理由の解釈、さらに補足的に項目単独で喚起されるイメージの報告を得ることの意義は大きい。というのは、それぞれの被験者において、各連想項目、各クラスターが、どのような個人的経験に由来しているのか、どのような感情や連想的意味を持つのかの全貌を、推測だけで得ることが不可能だからである。被験者に聴いてみないとわからないことが多いし、聴けば了解できることが多い。

集団による平均化されたデータの場合には、平均値的な代表者は実在しないから、直接質問して回答を得ることはできない。複数の被験者による回答の集合から推測することができるだけである。しかしながら集団データでは、特定個人における独自性は残差成分として排除され、共通性の高い変数だけが構造として浮かび上がる。そこで研究者が単独で推測した解釈であっても、研究者をも含めた共通性によって、別言すれば、研究者が持つ**共通主観**によって支えられ、妥当する可能性が高い。ただし、研究者相互の解釈がズレることが示すように、非共通主観による恣意的な解釈部分が残る。データの出力まではきわめて操作的・科学的であるのに、解釈段階に至った途端に研究者の共通主観に頼るという難点がある。

他方、1個人の連想項目やそのクラスター構造に関しては、被験者自身に尋ねることが可能である。変異の大きい被験者の独自性が反映された連想項目やクラスター構造から喚起されるイメージやまとまった理由の解釈を直接質問できる。事前に保有する共通主観だけで解釈することはできない。**非共通主観を共有するための手段**を必要とする。これが、そうしないとできないし、そうするから可能となる間主観的（intersubjective）な方法である。実験者と被験者が**同行**しながら被験者の内界を探索する方法はカウンセリング的であるが、客観的なクラスター構造というデータを媒介にして被験者の現象世界を了解するので、「現象

学的データ解釈技法」と呼ぶことができる（内藤，1993a，1994）。

臨床心理学的方法を援用した現象学的データ解釈技法を採用することで、PAC分析は単一個人の内面世界にかかわる認知・イメージ構造の解明のための道具を揃えたことになる。技法としてのPAC分析の最大の特徴は、下位技法として「自由連想」「多変量解析（クラスター分析）」「現象学的データ解釈技法」の3つを組み合わせたことである。

(5) 総合的解釈

最新の標準的技法では、総合的解釈の材料として、以下のような多種多様な情報を獲得する。①連想順位、②連想内容、③連想項目数、④重要度順位、⑤クラスター分析によるデンドログラム（樹状図）、⑥クラスターのイメージと解釈、⑦クラスター間関係についてのイメージと解釈、⑧（実験者が解釈しにくい、あるいは独自のニュアンスを持つと推測した）項目の単独でのイメージ、⑨項目単独での＋・0の（感情的・情緒的）イメージ、⑩被験者による解釈の際の非言語的行動（抑揚、言いよどみ、ため息、沈黙、身体動作、身振り・しぐさ等）、及び周辺の言語報告（「他にはない」等の繰り返し、感嘆、等）である。ここでは各情報の持つ意味を説明するにとどめ、実施上の注意や勘所についてはⅡ部「実施の手順と留意点」で述べることにしたい。

① 連想順位

連想順位はアクセシビリティ（アクセスしやすさ）に対応しており、生じやすい認知要素の内容を示すとともに、（クラスター分析で明らかにされるような）カテゴリーの間をどのような順序で検索していくかのプロセスを示すと考えられる。

② 連想内容

カードに記述させたり言語的に報告させる場合には、具体的な行動や事実かそれとも象徴的表現か情緒的表現か、文章か単語かそれらの混合か、肯定表現か否定表現か、現実行動の記述か希望の表明かなど、内容とともに表現様式も重要である。また、絵画で反応させるときは、描かれたものの大きさや色や位置関係も参考になる。演技（ビデオで収録）の場合には、非言語的な要素が重要となろう。

③ 連想項目数

連想項目数の多寡とPAC分析によって引き出される情報は、単純には対応していない。反応が同一カテゴリーに属するものか異なるものかによっても違おうし、どの程度の象徴的意味を包含するかによっても影響を受けるし、クラスターの解釈に際してどの程度付加されるかに依存しているからである。また各クラスターの項目数は、分化度（認知構造の複雑さや緻密さ）の指標としての意味を持っている。

④ 重要度順位

重要度順位の高いものは、臨床的内容にかかわるときは「主訴」に該当する。この指標によって、いかなる内容を取りわけ重要と感じているかが明らかとなる。

⑤ デンドログラム（樹状図）

デンドログラムは、クラスター分割の基準となることはいうまでもないが、項目の結節を続ける処理（HALBAUなどのソフトの場合に当てはまる、SPSSに組み入れられているものは併合された項目群と結節させるので該当しない）では、スクリプト（行動連鎖の結節の

スキーマ)が析出されることがある。クラスター間の結節は、カテゴリーの上位・下位関係を知ることができ、メカニズムの解明に有効である。

⑥ 被験者によるイメージと解釈(クラスター)

クラスターからイメージされるものや併合された理由の解釈の報告は、研究者が単独で推測することが不可能な、被験者の内面世界に関する豊かな情報をもたらしてくれる。そして、被験者のイメージに沿った研究者による解釈(命名)を可能にし、支援するものである。

⑦ 被験者によるイメージと解釈(クラスター間関係)

クラスター間関係についての被験者のイメージや解釈は、比較を通じてそれぞれのクラスターの内包がより明確となる効果を持つ。また、被験者自身によるクラスター間関係の意味づけは、実験者が全体構造やメカニズムを解釈する際のヒントをもたらす。

⑧ 補足質問(項目単独のイメージ)

上記⑥⑦において言及されなかったり、言及されたとしても不十分であると感じられるときに用いる。連想項目の中で、同一のクラスターに属するものとして解釈することが困難であるとか、一見すると自明のようであるが独自のニュアンスを持っている可能性があると感じられる場合には、項目自体のイメージ、また項目から連想されるものについて質問する。これによって了解ができるようになったり、豊かな追加情報を得ることができる。

⑨ 各項目単独での+-0のイメージ

+-0のイメージは、技法を洗練していく過程で重要な指標であることに気づき、後に標準的手続きに加えられたものである。各クラスター内での、また全体としての+と-の項目数の比率は、葛藤度ないしは両価感情度の指標となる。また、0項目の比率の高い場合には、情緒が喚起して苦痛が生じるのを避ける、「解離」や「自己疎隔感」の強さの指標として読みとれることが多い。

クラスターでの+-0の合計得点(+項目数から-項目数を引いたもの)は、クラスターの感情(欲求)の強さを表す。この得点によってクラスター間の力関係を示すことが可能になる。換言するならば、「心理的場」を図式的・数量的に表現したものになることを意味する。別の理論的観点からみれば、「コンプレックス構造」、「認知的不協和の構造」を意味する。

⑩ 被験者の非言語的行動

「つぶやき」「言いよどみ」「あわてた取り消し」「ため息」「頻りに頭に手をやる」「頻りに足を組み替える」「苦痛の表情」などは、コンプレックスに触れており、自我防衛的な緊張や不安の反応を意味することが多い。また、「上方を見つめる」「焦点が定まらず遠くを見つめている」などは、内界を探索している場合が多い。「沈黙」は、イメージが浮かばないとき、あるいは自我防衛の反応として表出しやすい。被験者の自我にかかわる内容の分析では、非言語的な反応が実験者による総合的解釈を裏付ける客観的な指標となることがあるので、注目し、記録しておくことが望まれる。

以上の諸情報を総合して最終的な解釈を得るのであるが、大量情報の中から核心的なものを選別しまとめるのは容易ではない。総合的な解釈のための具体的な方略については後述する。

3 PAC分析の利用

PAC分析は、自由連想（アクセス）を利用して態度やイメージの個人内構造を測定し、診断・分析する理論と技法である。連想刺激と連想反応には、言語を中心とするが、絵画・粘土細工・演技・音楽（作曲・演奏）などの非言語的なものも含まれる。完全自由連想では、実験者による連想刺激の提示がない（「何でも思いついたもの」「湧き上がってくる身体動作やイメージ」のように教示する場合には、厳密に言えば刺激が存在することになる）。構造は、連想反応間の類似度評定に基づいて、クラスター分析などで析出される。これらの基準から、PAC分析の適用範囲として以下のような限定条件が導き出される。

(1) 適用の限定条件

①適用は、原則として、自由連想できるものに限定される。しかし人間のイメージ能力の豊かさを考えれば、この限定条件はなきに等しい。実験や調査に際して現実の限定条件となるのは、自由連想を表現したり報告したりする能力である。被験者に表現・報告の能力さえあれば、ほとんど全ての対象（連想刺激）に対して適用可能である。

②類似度の評定ができること。通常は7から9段階であるが、少なくとも2段階（「近い」「遠い」など）の評定ができること。ただし、言語的に応答できる必要はない。例えば、カードや品物を3つずつ組み合わせ、類似度の高い方を近くに置かせる、などの手続きを考案することができるからである。

③クラスターを刺激としたときに生じるイメージや解釈の報告ができること。クラスターを構成する連想反応（カードや物品）を並べて（クラスター間の比較では、2つの反応群を近くに置くことによって）提示し、凝視時間や接近・回避（側で遊ぶ時間）の程度を観察して測定するなどすれば、乳幼児にも適用できるが、言語的な報告を得る場合に比べて質的な情報が貧困となる。

(2) 従来の集団的研究法との比較

次に、いわゆる法則定立的研究（集団的研究法）と比較しての長短を考察することで、利用範囲を検討しよう。

個人内の構造分析であるから、集団としての（賛成者数などの）出現頻度については不明である。この場合には、通常の調査法に取って代わることができない。PAC分析が威力を発揮するのは、少数者の質的分析においてである。わずか1事例においても、要因やメカニズムを発見する可能性を持っているからである。そこで大量には被験者を得られないとか、被験者間の差（変異）が大きい場合には、従来の研究法よりも遥かに有利となる。

例えば、筆者がある形成外科医から聞いた、次のような事例への適用を考えることができる。表現が悪いが、視線を向けるのをはばかれると感じられるような顔の形成手術をした患者さんが、ごく普通の顔になった。その患者さんは、「職場を変え、今までつきあってきた人たちとの交際を絶ちきり、全く別人として生き始めた」というのである。このような方こそ、アイデンティティの研究に該当する典型者といえるのではないか。大学生1,000人の調査をし、上位50人と下位50人を選抜したとして、果たして彼らは本当の意味での典型者といえるのであろうか。

宗教の教祖や政党党首は、一般信徒や一般党員と同じ態度次元をもっておりそれぞれでの強度が異なるだけである。こんなことが納得できるだろうか？ 信じられるだろうか？ 知人の統計専門家は、「統計的（推測統計学のこと）には5人以上いないと分析できない」と話してくれた。それでいいのだろうか？

研究価値は高いが、対象者が唯一者であり、独自性を持っているとしても、まさに研究すべき対象ならば研究に着手すべきである。既存の科学論や方法で捉えられるものだけが科学なのではない。既存の科学で捉えられないものを科学できるようにすることもまた科学である。飛躍をもたらす科学論や方法を創造すべきである。科学は、未知の世界に対して豊かに開かれているべきである。筆者は、「個」への新たな科学的アプローチの一つとして、PAC分析の理論・方法・技法を提唱する。より多くの「個」の科学が誕生することを期待しながら……。

(3) 既存の理論と測定技法としてのPAC分析

既存の理論や構成概念の中で、測定技法としてのPAC分析を利用できるものがある。ここでは、利用によって研究の進展が期待できるものをいくつか取り上げる。

①社会心理学において長らく重要テーマであり続けたものに「態度」がある。態度構造とは、その定義からして、個人における態度構造である。集団における共通変数の構造ではない。ところが、これまで開発されてきた測定法は、集団における共通変数による次元抽出と、個々人の（他者と比べての）相対的強度の算出である。個人別にアクセスさせた変数の構造分析をし、構造的強度を算出したものはない（内藤，1993a）。

②社会心理学以外にも多大の影響力を及ぼしたものに、Lewinの「心理的場」「葛藤」「アンビバレンツ」がある。理論としては存在しているが、個人別に測定する技法は開発されてこなかった。またFestingerの「認知的不協和」では、不協和の強さの一次的測定方法は提案されているが、個人内の「不協和の全体構造」の測定については提案されていない（内藤，1993a）。

③精神医学と臨床心理学の分野で著名なJungが自由連想の研究をしたことについては、すでに本稿でも言及している。彼は、反応時間を指標として数量的に群間の比較を試みている。しかしながら、一個人内での自由連想の構造を数量的に析出し、分析することがなかった。個人については、Freud以来の臨床的方法に回帰している。彼が提唱した「コンプレックス」を測定する技法としてPAC分析を活用できる（内藤，1994）。

上記のような古くから問題とされながらも測定技法が未開発であったテーマに、新たな測定技法としてPAC分析を活用することができる。この他にも、スキーマ、スクリプト、ステレオタイプ、社会的カテゴリー（社会的アイデンティティ）の測定などへの適用可能性を持っている。

(4) 臨床的応用

上記(3)での「心理的場」「葛藤」「アンビバレンツ」「コンプレックス」の測定への適用は、臨床への応用可能性を示すものであるが、もう少し詳しく説明しよう。

事例研究法は、事例を詳細に吟味することで、決定因やメカニズムなどを発見する価値を持つことについてはすでに触れた。このことは臨床においては、ケースの診断に利用できることを意味する。例えば、ストレスについて扱うとき、他者に比べての刺激への過敏性、防衛機制を用いる程度がわかるだけでは治療に直結しない。PAC分析などによって、該当者にとってのストレス刺激が何であるか、どのような身体反応や心理的反応が生じやすいか、どのような防衛機制や対処機制が発動されやすいか、といった構造を診断できたときにこそ、認知行動療法などが本格的に適用できるのである（内藤，1993b）。実は、治療対象者1名だけの構造分析に基づく治療は、既存の治療技法の中でも利用されている。次元ではあるが、行動療法の一つである**系統的脱感作法**における**不安階層表**がそれである。それならば、もっと本格的に、全体的な構造を測定して活用すべきであろう。PAC分析のように被験者自身にも構造分析に関与させれば、自身の問題について気づきをもたらしたり、治療意欲を喚起することにもなる。この点は個人についての診断・治療に限定されるものではない。学級経営の診断や介入法の考案（内藤，1994）など、リーダーやファシリテータの認知を通じてさまざまな集団での診断・介入にも利用できる（内藤，1993a）。

また、PAC分析での被験者による連想項目の内容やクラスターの解釈の仕方は、その人の対象の捉え方、すなわち「**体験様式**」を意味している。したがって、個別の問題事項の分析だけでなく、体験様式の分析が可能であるということにもなる。

他には、実験調査という形式をとりながら深い開示を繰り返させるので、治療的人間関係を構築したり深めるのに利用できる。

さらに、他者のものも含めて、ケース分析結果のディスカッションを繰り返すことによって教育訓練の効果を期待できる。いわゆるケース・スタディの方法として活用できることを意味する。

4 PAC分析使用上の注意

PAC分析においては、被験者は連想項目の構造までチェックすることが困難である。孤独感のPAC分析をしているときに、「（実験者に）わからないようにチェックしたが、はっきりと現れている」と答えた被験者がいた。差し障りのないように架空の事例を作ると、異性と同棲をして別れたある女性が、彼と過ごした部屋にあった「赤いバラ」「風にそよぐカーテン」と、アパートの入り口に置かれた彼の「自転車」が印象に残っていたとする。「赤いバラ」などの項目は単独では、何ら感慨を起こさない。しかし、「赤いバラ」「風にそよぐカーテン」「自転車」の3つがセットにされたとき（コンプレックスとして連合していることに、類似度を高く評定していながらも気づかなかつたのが）、突如彼と共に暮らした日々の情景が浮かび情緒的混乱をもたらすということになる。

被検（験）者が構造まで気づくことが困難であるという特徴を悪用するような調査は許されない。また、コンプレックスにかかわることが予測できる場合は、その種の被験者の面接調査を体験しているとか、カウンセリングなどの臨床体験を持っているなど、被験者の内面の葛藤や情緒的混乱に対処し得る能力を持つ者、の他は深入りを避けるべきである。被験者が自我防衛を発動しているときには、たとえ臨床家であっても被験者と治療的關係にない場合には、「**明確化**」を誘導すべきではない。継続的に治療的關係を持たない、最後まで関わ

れない状況で治療を押し売りすべきではない。防衛を保持させるべきである。クラスター構造は、実験者やカウンセラーが主観的に分析したものではなく、被験者自身の評定によって作成された類似度距離行列に基づきパソコンで算出されたものである。実験者やカウンセラーの誤認に帰属することができない。内界の隠された否定しようのない現実には、無防備に直面・対決させる危険性があることを忘れてはならない。

II 実施の手順と留意点

研究と実践のいずれを主目的とするかで、作業手順や留意点がいくぶん異なるが、本論文では特に区別しないで記述する。どちらが主目的であっても、知っておいた方がよいと考えられるからである。また、組織的に観察・調査して分析していない知見や仮説も多く、なぜそうした方が効果的なのかについて言及しないこともあるが、豊富な利用体験に基づくものである。いずれ検証されることを望むものであるが、当面は仮設として利用に資していただきたい。

1 準備段階

(1) 研究テーマの選定／診断・治療での利用

研究テーマとしては、個人別に構造分析すべきではあるが、これまで試みられていないものについて取り上げることができる。この点に関しては、現段階では無尽蔵に近い。また、要因の効果が個別的にしか検討されていないものについては、複合的に関与すると考えられる別の要因に関するものを併せて刺激として呈示し、ホリスティックなイメージ構造を分析するのも有効である（例えば、性の欲求や衝動と恋愛感情など：内藤，1994）。

臨床実践での診断・治療に利用する場合には、自明であるが、クライアント（患者）の問題に合わせて、自在に連想刺激を作成する。一人ひとりの問題に合わせた心理テストをその場で作成し、個人内の構造を分析することができる、という意味にもなる。治療効果の検討に用いる場合には、構造の質的变化を分析する。

(2) 実験（調査）計画／診断・治療効果の測定計画

研究と応用のいずれにおいても、質的分析に際して有効なのが、対比効果と同化効果の利用である。比較には、実験計画における被験者内と被験者間に該当する、「同一個人内」と「個人間」がある。研究の場合には、セルの代表が1人または少数という点が異なるだけで、その他は実験計画での要因配置を想定することが望まれる。実験計画に手慣れた者には説明を要しないが、以下に例をあげておく。

①同一個人内では、複数の対象に対してそれぞれにPAC分析を行い比較する場合と、同じ対象に対して継時的に測定して比較する場合とがある。両者を組み合わせるのも有効である。例えば、不登校児で「学校」「級友」「担任の先生」「母親」「父親」の分析を、治療の経過時点ごとに繰り返すなどが考えられる。対象の代わりにある種の状況下に置くとか、何らかの体験をさせるなどの操作を加えることもできる。対応のある、あるいは同一被験者における繰り返し法を用いた実験計画に準ずるといえよう。

②個人間の比較については、実験計画での被験者間要因配置のように、経験の違い（例え

ば、性体験）や属性の違い（例えば、性別、職業）などで、それぞれに独立して集団の代表となるような選び方をする。ある種の状況下に置く、何らかの体験をさせる等の操作を加える条件を組むこともできる。

③実験計画での被験者内、被験者間要因を組み合わせる（要因の一部が「対応あり」の方法に準ずるものもある。例えば、男性での条件1, 2, 3の繰り返しと女性での条件1, 2, 3の繰り返しを組み合わせる方法。

PAC分析が当該テーマにおいて有効であるか否かを検討する目的の場合を除いて（その場合でもできれば）、被験者は複数（被験者間と被験者内の組み合わせでは、被験者間要因のそれぞれの条件で複数）であることが望まれる。ただし、治療の実践を目的とするときや得難い典型者の研究の場合には、1名で1つの対象についてであっても分析する価値がある。

(3) 連想刺激の作成

完全自由連想法のように連想刺激を呈示しないものもあるが、何らかの刺激を呈示した方が反応を得やすい。刺激の内容を変えるだけでありとあらゆる対象へのイメージ構造を分析できるのであるが、TATやロールシャッハの図版、SCTの刺激語におけるように、**連想刺激の質が反応の質を決定する**。連想刺激はPAC分析の成果を左右する最も重要な要素の一つである。

刺激の種類としては、文章、音声、図版、ビデオなどから、分析の目的に適合するものを選ぶ。刺激において肝心な点は、予め、抽象的・一般的なスキーマやステレオタイプを引き出すことを目的とするのか、それとも具体的・個人的なものを引き出そうとするのかを明確にすることである。例えば、「大学とは」は前者に、「あなたにとっての大学とは」「あなたにとって、在学している大学は」は後者に該当する。

また、全体構造を緻密に検討するときは、「あなたにとってのストレスとは」ではなく、「あなたは何によってストレスを感じますか。またストレスを感じているときは、どのような身体的・心理的反応が生じますか。どんなことをしたくなったり、実行しますか。対人関係はどのように変化しますか。」のように具体的な要素項目を組み合わせで構成する。刺激文が長い場合には、刺激を呈示したまま連想させる。

(4) 連想反応の指定

連想反応は言語（文章・単語の文字ないしは音声表現）と非言語（メロディ、彫塑、演技、絵画など）のいずれであってもよい。反応間の類似度を評定させるために対呈示するときには簡便なのは、カードやテレビの利用である。これに対応するのが文字や絵画である。集団事態で実施するときも、他の被験者の反応を隠しやすいし、簡便である。

反応数が増加すると組み合わせの数が膨大となるので、「意味あるもの」「重要なもの」として、あるいは数そのものを制限することがある。また、逆に連想反応を産出しにくい刺激の場合には、（分析のための情報を多く獲得するために）目標として設定することもある。数の目標を設定しなくても、「もっと浮かんできませんか？」と教示すると、連想が続くことが多い。集団事態で実施すると、他の人がまだ反応しているのを観察できるので反応数が

増加する事が多い（社会的促進）。数の制限には、「15」とか「20」と具体的に指定したり、「20程度」と緩やかに制限する場合とがある。筆者の体験によると、無制限としても30を越えるケースは少なく、きちんと調査していないが、37以上出現したのは2%以下であったと感じている。

制限時間は、集団事態で実施するときや、アクセシビリティの高いものだけを得たいときなどに、設定することがある。無制限としてもほとんどのケースでは10分以内であるから、内面深くを探索したい場合には制限しない方がよい。

2 実施段階

下記(1)~(3)までは、集団事態での実施が可能である。手続きのうち(1)~(2)、(3)、(4)~(5)は3分割して実施することができるが、あまり時間間隔をあげない方がよい。最後の(6)は、実験と切り離してもよいし、再検討を繰り返すほど良質となる。

(1) 契約関係

この契約関係の項は、使い方によっては被験者の内面深くを分析する威力をもつことを十分に認識せず、筆者自身はずさんであったことを反省しながらまとめるものである。被験者にとって内密性の高い内容を分析するときには、遵守していただきたい。

実験に先だって、「被験者からの申し出によって、いつでも**実験を中止**したり一部について**回答を拒否**することが可能である」ことを伝える。

面接場面（インタビュー）は、プライバシーの保護と被験者が内省しやすいように、実験者と被験者の2名とすることを原則とする。面接をテープに録音したり、録画する場合には、被験者の許可を得る。結果の公開が予測できるときは、専門家の間での公開に限定するのか、一般公開であるのかを伝え、**プライバシーや権益の保護**を最優先することを宣言し、あらかじめ被験者の承諾を得ておく。また、公開についても、公開直前までに承諾を取り消しできることを伝える。

なお、診療機関で治療を目的として実施する場合には、内部の専門家間で事例検討するのは自明であるから、この範囲内ではとくに承諾を求める必要はない。

実施法訓練のワークショップなどでは、参加者同士が実験者になり被験者となるが、プライバシーと人権の保護、公開についての条件を、互いに誓約し宣言させることが必要である。（臨床の専門家を対象としたワークショップでは、「自明のこと」とされているが、主催者か訓練者が明言しておく方がよい。）

(2) 連想順位と重要度順位の測定

連想順位は、カードへの記入や口頭での報告などを通じて自動的に得られる。重要度順位については、「プラス・マイナスの方向に拘わりなく重要と感じられる順序」としての回答を得る。連想反応をカードで記入している場合には、並べ替えるだけなので、順位づけが容易である。同順位と感じられる項目については、強制選択（ほんのわずかな差を感じさせて決定させる）を原則とするが、どうしても決められないときは、（重要度距離行列を用いてクラスター分析するときには必要なので）連想順位の早い方を重要度の高い順位とする。強制

選択でも決定できないのはまれであるが、便宜的に順位づけした部分については、「総合的解釈」においては、同順位として考察する。

(3) 類似度距離行列の作成

クラスター分析で出力されるデンドログラムの項目番号は、距離行列の行列の番号と同じである。筆者が数多く試みた体験によれば、重要順位の方が解釈に貢献することが多い。そこで行列の番号は、重要度順位に対応させて作成することを勧める。(連想順位の方が重要と考えられるのは、認知科学などの研究においてであろう。)

反応数が多いと距離行列の作成にかなりの時間がかかるので(例えば、反応が30とすると、同一項目の組である対角線部分を除いた評定数は $(30 \times 30 - 30) \div 2 = 435$ となる)、ランダムに對しながらかちんと回答する被験者の場合には自宅などに持ち帰っての作成を依頼することもある。(ランダムにするのは系列効果を避けるためである。)

コンピュータでのプログラムを作成して、「連想反応のランダムな対と評定尺度の画面への呈示」→「被験者の回答入力と距離行列の作成」→「クラスター分析」→「デンドログラムへの連想反応記入」が自動化されると、実施時間が短くなる。今後の開発が望まれる。

(4) クラスター分析

標準的なPAC分析では、クラスター分析を利用しているが、多次元解析(MDS)でも、両者を組み合わせてもよい。既述のように、クラスター分析(階層法)を用いるのは、被験者にとってイメージや解釈が容易であることによる。また項目やクラスターの結節(結合)情報は、スクリプト、上位・下位関係、メカニズム(クラスター間の関係)を読みとるのにも適している。

クラスター分析にはワード法を用いている。これは有効な解釈を得やすいといわれることが多いし、筆者自身の経験でも同様であった。筆者以外の使用者のものを含めて、かなりの数のPAC分析の研究で有効性が確認されているので、ワード法の使用をお勧めする。

クラスターを解釈する従来の方法は、デンドログラム(樹状図)を横断的に直線で切断するものである。筆者も、当初は、従来の操作的基準に従っていた。ところが、やがて次のような現象に気づいた。被験者によっては、「斜線」や「曲線」で切断した固まり(クラスター)のイメージが強く、その方がしっくりすると報告したのである。結局のところ、集団の反応データにより析出する従来の方法では、既述のように、被験者集団に解釈させるのは困難であるし、共通変数の構造であるため実験者1名による解釈が容易であるといえよう。

これに対して被験者1名のデータでは、当事者本人に解釈を求めることが可能であるし、当人の独自のニュアンスや経験を含蓄する変数から構成されているので、逆に積極的にイメージや解釈の報告という支援を求めるべきであるといえよう。またこれによって、操作性・客観性の根拠を、デンドログラムの切断の仕方(垂線)にではなく、被験者自身の内界のイメージに求めることも可能である。同時にこれによって、クラスター分析では切断する距離の決定が研究者の解釈に依存しており不安定である、との批判に応えることになる。このようにして、「被験者がそのように強く感じているのだから仕方がない、どうしようもない」という意味も含めて、「被験者の併合イメージ」に拠り所をおき、斜線・曲線で切断すると

いう、「個」へのアプローチならでは、新たな操作的・客観的基準が誕生することとなった。それでは、クラスターの切断についての作業は、具体的にどのように進めるのかということになる。筆者は次のような手順を採用している。

まず、デンドログラムの図中に連想反応を記入する。これは筆者が考案したものであるが、図中に書いた方が、スペースを節約できるだけでなく、クラスターのまとまりやその解釈が著しく容易になる。

さて、クラスターの決定に際してであるが、一定の距離（横断直線）で切るという従来の方法は、かなりの適合性があったからこそ続いてきたのである。被験者の方でも、統計データを読み慣れていないとか、クラスター分析を使ったことのない者には、いきなりデンドログラムを見せて解釈させようとしても困難である。そこで、まず実験者が解釈を試みる。デンドログラムに定規を当ててズラしながら、できるだけ直線で妥当する（と思われる）解釈が得られる位置で切断する（Fig.10参照）。体験的であるが、筆者は、これを最初に試みるのが有効な解釈を得るために不可欠であるとの実感を得ている。これを提案する形で、被験者のイメージや解釈を引き出す（次項(5)を参照）。図中に連想反応を記入したものをコピーし、一部は被験者への呈示用とし、もう一部はクラスターの分割部分をそれぞれ鉛筆などで大きく囲み、実験者の書き込み用とする。被験者用では囲みを記入しないのは、実験者による原案を離れて内省しやすいようにするためである。

(5) 被験者による解釈と報告、その記録

(面接室について)

デンドログラムの結果について被験者にイメージさせたり、解釈させるときは、実験者と被験者が面接室などで対面した状況の方がよい。プライバシーの保護になるだけでなく、被験者が落ち着くし、レポートの形成が容易となるからである。面接のための部屋は、特別な設備など必要ないがあまり広くないものとし、実験者が記録しやすい、録音する際にはテープレコーダを置く（音の収録効果がよいし、録音することを被験者に見せる）ためのテーブルやイスを用意する。

(質問の仕方)

PAC分析では、被験者がデンドログラムからイメージしたり解釈したのも、質的データとして利用するという特徴がある。したがって、イメージや解釈を引き出す技術も重要となってくる。詳しくは後続の実施例を参考にさせていただきたいが、以下の事項に留意することが必要である。

手順としては、まず、①各クラスターのまとまりを、上から順番に、被験者が連想項目の内容を味わいながら感じられるように、一つ、一つ、間を置きながら、ゆっくりと読み上げる。実験者が、質問や応答を、まるで一つ一つ確認するように、ゆったりと発声することで、次の効果が生じる。(ア)被験者は緊張が取れ始め、次第にゆったりとしてくる。(イ)ゆったりと手でさわったり、身体をすり寄せていくような感覚で、内界に入り込み、イメージに触れながら、感覚を味わいながら感じ続けることができるようになる。(ウ)実験者とゆったりと応答することで、実験者と同行して内界を旅しているような感じがしてくる。

具体的には、「□○○○」……、「×××」……、「□□」……、が1つのグループにまとま

っているようですが、これらのグループから、どんなイメージが湧いてきますか……、またどんな内容でまとまっていると、感じられるでしょうか?……」と質問する。被験者に内界で発生するイメージ・感覚・感情を「感じさせ続けること」、自由な回答を可能にする「オープン・クエスチョン」が原則である。「実験者もまた感じ続ける」こと、質問することよりも「被験者にとってのイメージ」を共に感じ続け、「被験者のイメージの流れに寄り添う」同行者として、傾聴する姿勢を保ち続ける。やがて強いラポートが形成され、コンプレックスにかかわるような内容では転移現象が生じることがある。被験者も実験者も「理解しようとするのではなく、感じ続けること」が肝要である。これは、クラスターを構成する項目はクラスターの内容を代表するというよりも、「全体内容を引き出す重要な手がかり刺激」としての意味を持っているからである。実験者が被験者の沈黙を受け止め、実験者の方からも沈黙という〈間〉を構成しながら、「他にはありませんか?」「その他にはどうでしょうか?」と繰り返し続けることで、飽和したり疲れてきた被験者は再び内界の探索を繰り返す。沈黙の後の発言を待っている実験者には、沈黙時間が冗長に感じられることがあるとしても、被験者にとっての沈黙は、感覚や感情のただなかにあり、内界を探索している充実時間なのである。実験者は、被験者の沈黙そのものを共に感じ、味わうことである。そうすると、冗長な感じがしなくなってくる。ワークショップで見かけるのだが、被験者の沈黙に耐えられないとか、解釈聴取段階で実験者自身の関心・興味を満たすための質問をするなどは論外である。内界を探索する旅を続けている被験者は、飽和したり、疲れて休みたくなることがある。沈黙は、被験者の休憩を意味するときもある。

次に、第2クラスター、第3クラスターと続き……、第1クラスターと第2クラスターの比較に移る。「今度は、1番上の「○○○」……、「×××」……、「□□」……のグループと、2番目の「ZDSA」……、「WKIG」……、「TyhI」……、「IIgt」……のグループを比べてみてください」、「どんなところが似ていて、どんなところが違うと、感じるでしょうか……、比べたときの同じところ、違うところについて教えてください」というように、質問する。再び、実験者が被験者の沈黙を受け止め、実験者側からも沈黙の〈間〉を構成しながら、「他にはありませんか?」「その他にはどうでしょうか?」と繰り返し続けることで、被験者は内界の探索を繰り返し続ける。ついで、第1と第3、第2と第3というように、比較を続けさせる。やがて全ての組み合わせが終了する。そこで、全体のイメージを感じさせ、報告させる。

次に、②連想項目の中で、実験者にとって「意味不明瞭なもの」「クラスターの他の項目とのまとまりが了解しにくいもの」「一見すると自明のようであるが、独自のニュアンスを含むと感じられるもの」を取り上げ、それぞれの項目から連想されるイメージを尋ねる。これが補足質問であるが、異文化圏からの被験者の場合には、余裕があれば全項目の単独イメージを聴取しておくのが有効である。聞くまでもないものであったとしても、そのことが確認されるという意義がある。筆者自身が、自明だろうが「何かありそう」と感じた項目で質問し、「個人的体験に基づく重要な意味がある」ことを知らされたという体験を少なからず持っている。

最後に、③項目単独での+-0のイメージを「言葉の意味ではなく、実際に感覚として感じられるもの」と教示しながら質問する。

(非言語的反応)

準言語的な反応としては、文字化するのが困難なものが多いが、「んー……」「ん、んっ」「うっん」「うん」「うっうーん」などのため息や応答、「チャッ」「ツァ」「ツァ」などの舌打ち、微妙な抑揚の上がり(↑)下がり(↓)、短い沈黙(……)あるいは長い沈黙(……………)にも注目して記録する。語気強く発音したときは、大きめの字で書いたり、(!)や(!!)マークをつける。疑問と強調が重なったときは、(!?)か(?!)で表記したりする。小さな声での語りは、記録する文字を小さくして記録することもある。

非言語には、身振りやしぐさ、手を頻りにすり合わせる、テーブルを指先で叩く、腕を組む、頭に手をやる、足を組み替える、片手の人差し指と中指と親指で鉛筆を振り回す、天井に目をやる、焦点の定まらない目で遠くを見つめる、瞬きの連続、体を持ち上げる、肩を落とす、などがある。

準言語も非言語も、不安、緊張、いらだち、情緒的混乱、内界探索中、といった被験者の内面の状態を推測させ、仮説を立てるヒントをもたらす。

言語的記録にこれらの記録を加えることによって、場面の雰囲気がわかり、臨場感が著しく高まる。両者の情報を併せることで、自我防衛、情緒的混乱、気づきを得ての感動、などが明瞭になることが多い。

(記録の仕方)

記録は、あるがままの描写に心がけ、実験者の解釈よりも客観的に観察される事実の記録を原則とする。テープレコーダーで録音したり、ビデオに収録する場合であっても、できるだけその場で文字に記録しておく方がよい。録音・収録したものを文字化するのに時間がかかるからだけではなく、非言語の情報やその場の雰囲気の全てをテープに収録しておくことができないからである。

表記については、例えば、

「そういうのってわかんない。……うー……、どう言えばいいんだろう？ うーん、ん、私って、そのー、(目を両手で覆いながら)やっぱ悲しい、嫌だーん(↑)……………。実は、母親が嫌いなんです！ (両手を突き出して、押しのけるかのように)わかってくれないんです。(うつむきながら)私のことを、」

というようにする。記録にはA3用紙の端などにデンドログラムをコピーしたものをを用いると便利である。クラスターの解釈のときは、デンドログラムの連想項目の囲みから線を引っ張って、どの部分の記録かがわかるようにする。クラスター間の比較のときは、例えば、(1-2の比較)と書いてから続ける。用紙が足りないときは追加し、最後にホッチキスなどで閉じておく。

(被験者における構造分析のプロセス)

ここで、被験者における構造分析がどのように進行していくのかを理解していただくために、図式的にまとめておこう。被験者の解釈段階までのPAC分析の一連のプロセスは、刺激に対する自由連想、連想項目間の類似度評定、距離行列によるクラスター分析、各クラスターに対しての被験者自身によるイメージや解釈の検討、クラスター間を比較してのイメージや解釈の検討、となる。これらのプロセスは、次のことを意味している。すなわち、連想刺激からの自由連想、それらの構造の析出、構造への自由連想や構造の解釈、それら下位

構造の輪郭や関係の明確化への進行手順は、「連想刺激」を出発点として「自由連想」と「まとめ」という作業手続きを繰り返すことで、次第に個人の内面深くを掘り下げ、深層構造の解明へと進んでいく作業に他ならないといえよう (Fig.1参照)。こうしたプロセスは、カウンセリングの進展段階そのものと対応していると考えられる。大きな違いは、カウンセ

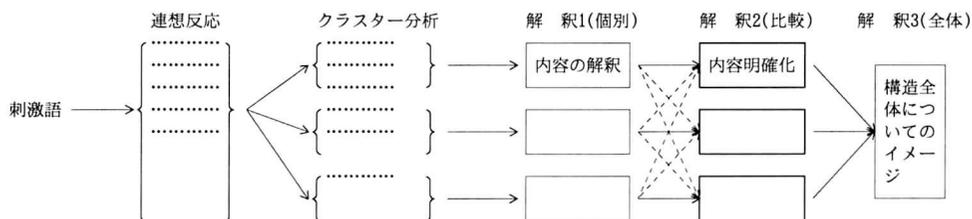


Fig. 1 被験者における構造分析のプロセス [内藤 (1994) より]

ラーの直観的分析に換えて、客観的・操作的な手続きと数量的な解析法を援用し、被験者自身の連想・評定と解釈の作業に圧倒的な比重を置いていることである。そして、自由連想を利用することで、抑圧等の自我の防衛機制の影響を受けやすい、被験者の深層部の心理的内面構造にまで迫ろうとするものである。

(6) 総合的解釈

被験者によるイメージや解釈を聴取するときは、被験者のイメージの流れに沿って同行し、ひたすら傾聴につとめる。実験者は、被験者との(心理的)距離を保ちながら、自らの修得している知識や先入見を傍らに置き、白紙のような気持ちで、考えるのではなく感じ続けるようにして、被験者の言葉や感情、身振りやしぐさの全体を受けとめ続ける。判断するのではなく、いわば「こころで感じ、こころで聞くかのように」して、被験者についての感覚やイメージが湧き上がってくるまで、そのときがくるまで待ち続ける。カウンセリングなどの臨床の実務を体験していない者にとっては、「耐えに耐えて思考停止を続ける」というように感じられるであろう。経験を積むと、被験者のゲシュタルトが「ふわー」と浮かび上がり、身体全体で実感しているという感覚を得ることができるようになるであろう。

これに対して、総合的解釈段階では、既存の知識(新たに文献に求めたものも含めて)をフル動員し、全体の情報を統合しながら、全知全能を傾注する感じで、決るようにシャープに考察する。総合的解釈では、PAC分析に限らないが、露骨なほど実験者(研究者)の力量があらわになる。

ここで、客観的な指標となるデンドログラムの読み取り方のポイントに言及しておこう。

距離は、それぞれが結節するまでの距離を意味するが、絶対距離よりも相対距離の方が解釈に貢献する。その理由としては、被験者によって異なる項目間の類似度評定の遠近の強調度、ないしは尺度の端につけがちか中央に寄りがちかの傾向を反映するからである。傾向に個人差があるとしても、同一被験者内での相対距離は意味を持つ。第2点としては、被験者内のイメージの固まりとその相互関係は、その拡がりの大きさに拘わりなく意味を持つからである。例えば、宇宙の星雲群は全体として拡大したり縮小したりしているが、太陽系のようなそれぞれのまとまりは意味を持っている。

項目やクラスターの結節については、解釈(命名)のために切断了距離の、前後につい

でも考察対象とする。初学者の中にはクラスターの有力なまとまりを見いだして命名した途端に、前後の情報を捨てる者がいる。クラスター分析では、全変数から出発して最終的に1つに結節されるまでの全体が意味を持っている。従って、それぞれの項目(変数)が結節されていくプロセス全体を丹念に読みとることが必要である。そこには、上位・下位関係やスクリプトなどの情報が含まれている。命名されたクラスターが相互にどのように結節されるかは、構造やメカニズムの解釈をする際の貴重な情報源となる。また、同一距離による横断的切断はクラスターの命名に関する1つの根拠である。これらを読みとるからこそ、そして被験者からの報告と併せるからこそ、被験者以上に被験者の内界を理解する可能性が生まれるのである。

クラスターの命名は、因子分析の因子や多次元解析の次元の解釈と同じく、解釈者の解釈の仕方によって大きく左右される。PAC分析においては、クラスターについての被験者のイメージや解釈、クラスターを構成する項目それぞれについてのイメージ、これらを丹念に反芻し、他のクラスターとも比較し集約しながら、さらには関連する理論や知識を跋渉して、要約したものを表現する熟語や文章をいくつか考え出す。それらの記述された言葉や文章を代表するものを創造的に概念化する作業が、「命名」という行為である。この命名(コピー)の質が、命名されたもの同士の関係、すなわち全体の構造やメカニズムの解釈の質を決定する。デンドログラムに「命」を吹き込むのが、命名という行為なのである。

以下に総合的解釈のためのステップをまとめる。

(第1ステップ)

単一の指標から安易に結論づけないで、各種指標の結果を繰り返し繰り返し感じるように読み取り続けながら、確認する。やがて、ゲンシュタルトのように被験者の全体イメージが浮かんでくる。外国語の翻訳のとき、逐語訳しながら読み進めると、解釈を誤ることが多い。翻訳しないで原語のまま繰り返し読み続けていると、急にわかるようになるのと似た過程である。まず被験者の内界を十二分に味わってから、次のプロセスに移ること。

(第2ステップ)

データの結果を要約するだけでなく、既存の理論や知見を参照しながら意味づける。現代の学問の最先端の水準で解釈する。

(第3ステップ)

一步も二歩も踏み込んで、飛躍を試みながら、価値創造的な解釈をする。データの記述レベルから、「かのように見える」「仮説的に○○であるかのように解釈することもできる」の考察を繰り返し、当該の現象に、既存の理論や知見に、新たな発見的価値をもたらすような解釈可能性を求め続ける。

以上の全過程の作業が終了したとき、「ごく平凡な」と思われた被験者がそれぞれに豊饒な内的世界を持ち、探索する中で出会い気づいたイメージを、豊かなニュアンスを包み込んだ言葉やしぐさで、そして「全身」で語り続けてくれていたことを了解できるであろう。それぞれの被験者の小宇宙に、被験者とともに旅立ち、そこで出会う惑星群の構造やメカニズムを理解できたとき、言い知れぬ感動を覚える。筆者は、PAC分析を繰り返し続けることで、臨床の世界でいわれる、「クライアントは、自らが知っている以上のものを捉えている」との意味を実感するようになった。自らが捉えているものを感じ続け、同行するカウンセラ

一とともに、イメージ化し言語化していく過程が、「気づき」であり、「明確化」の作業なのである。そして、人間のあらゆる英知が、科学理論が、意識化され概念化されるよりも前に捉えられたものによって、創造され展開されていることを実感するものである。

(7) 情報公開にあたっての注意

被験者の承諾を得て公開する場合であっても、内密性の高い内容に関する結果については、重要な研究意義があっても、「○○」のように伏せ字で記述するなどにより、被験者が特定化できないように注意する。

III 実施の実例

ここでは実施の実例として、孤独感の誘発刺激や身体的・心理的反応、防衛機制や対処機制の構造を検討するために PAC 分析した事例の 1 つを取り上げる〔内藤(1995)より抜粋〕。

方 法

被験者 被験者は、学部 3 年生女子 1 名。生活形態はアパートでの一人暮らしである。

手続き まずはじめに、連想刺激として、以下のように印刷された文章を呈示するとともに、口頭で読み上げて教示した。

「あなたは、どのような場面や状況で孤独を感じやすいでしょうか。そして孤独を感じているとき、自分がどんな状態にあると感じるでしょうか。また、どんな行動をしたいと感じたり、実際に行動しがちでしょうか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して下さい。」

ついで、おおよそ縦 3 cm、横 9 cm の大きさのカードを 40 枚程度被験者の前に起き、頭に

Table 1 連想項目一覧

想起順	内容	重要順
1	テレビの放送が終わった時	⑭
2	パーティーの後	⑪
3	誰かに片想いしている時	②
4	信じていた人に裏切られた時	①
5	絶望する	⑯
6	自分の居場所がない	⑥
7	泣く	③
8	音楽を聞く	⑩
9	誰かに電話をする	⑤
10	アルバムを見る	⑮
11	遠くにいる人に手紙を書く	⑫
12	日記を書く	⑦
13	周囲に人がたくさんいるのに知ってる人がいない	⑬
14	独り言を言う	④
15	花を買う	⑧
16	お酒を飲む	⑨

浮かばなくなるまで自由連想させた。このあと、今度は肯定か否定かの方向に拘わりなく重要と感じられる順にカードをならべ換えさせた (Table 1 参照)。ついで項目間の類似度距離行列を作成するために、ランダムに全ての対を選びながら、以下の教示と7段階の評定尺度に基づいて類似度を評定させた。

教示と評定尺度 教示は、下記の〈教示と評定尺度〉が印刷された用紙を被験者に呈示したまま、「 」の部分の部分を口頭で読みあげることとなされた。

「あなたが自身の孤独感に関連するものとしてあげたイメージや言葉の組み合わせが、言葉の意味ではなく、直感的イメージの上でどの程度似ているかを判断し、その近さの程度を下記の尺度の該当する記号で答えて下さい。」

- 非常に近い……………A
- かなり近い……………B
- いくぶんか近い……………C
- どちらともいえない……………D
- いくぶんか遠い……………E
- かなり遠い……………F
- 非常に遠い……………G

クラスター分析及び被験者による解釈の方法

[クラスター分析の方法]

上記の類似度評定のうち、同じ項目の組合せは 0, A は 1, B は 2, C は 3 というように、0 から 7 点までの得点をあたえることで作成された類似度距離行列 (Table 2 参照) に基づき、ワード法でクラスター分析した。(A~G の記号は、被験者に行列に回答させ

Table 2 連想項目間の類似度距離行列
(行列の○内の番号は各項目の重要順位)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
①	0															
②	4	0														
③	1	1	0													
④	3	3	2	0												
⑤	2	2	4	6	0											
⑥	1	3	3	2	5	0										
⑦	2	2	6	1	3	2	0									
⑧	6	1	6	4	3	1	5	0								
⑨	1	6	2	2	3	6	3	5	0							
⑩	5	3	1	2	3	3	1	1	5	0						
⑪	7	1	6	2	6	7	5	7	3	4	0					
⑫	2	5	4	1	1	3	1	7	3	7	6	0				
⑬	3	3	2	6	1	1	6	2	4	2	6	2	0			
⑭	7	6	4	2	6	4	6	7	5	4	1	6	6	0		
⑮	2	2	5	2	2	2	6	5	6	3	3	2	2	6	0	
⑯	1	3	6	6	6	2	6	7	6	6	7	7	7	7	5	0

るとき、すでに記入した他の組み合わせの結果を意識化させないように用いたものであるが、渡辺ら（1994）の報告にみられるように直接1～7の得点で回答させても問題がないようである。）

ここで、統計ソフト“HALBAU”によるクラスター分析の実際を示す。ソフトの立ち上げは、

HAL

と入力し、リターン・キーを押す。画面に案内文が出力され、左下に、

どれかキーを押して下さい

と書かれている。キーを押すと、Fig.2 の画面が出力される。

```

統計学パッケージ<HALBAU>メニュー
-----
1. データおよびファイルの操作関係メニュー
2. 基礎統計学パッケージのメニュー
3. 多変量解析パッケージのメニュー
4. 終了
-----
何番ですか》？

```

Fig. 2 画面への出力

3を入力してリターン・キーを押すと、Fig.3 の画面に変わる。

```

多変量解析プログラム メニュー
-----
1. 重回帰分析と数量化理論1類
2. 主成分分析
3. 正準相関分析と数量化理論3類（双対尺度法）
4. 判別分析
5. 数量化理論2類
6. 非線形モデルと生命表解析
7. 因子分析
8. クラスター分析（階層的手法）

X. 前メニューに戻る
-----
何番の方法で分析しますか》？

```

Fig. 3 画面への出力2

8を入力してリターン・キーを押すと、Fig.4 の画面に変わる。

```

[クラスター分析]

データ入力は何のどれですか？
-----
1. データ・ファイルから入力
2. 相関係数行列（キー・ボードから入力）
3. 距離行列（同上）
4. 平方距離行列（同上）
5. 分析指定画面に戻る
-----
何番ですか》？

```

Fig. 4 画面への出力3

3を入力してリターン・キーを押すと、Fig.5 の画面に変わる。

[クラスター分析]

データ入力は次のどれですか？

-
1. データ・ファイルから入力
 2. 相関係数行列（キー・ボードから入力）
 3. 距離行列（同上）
 4. 平方距離行列（同上）
 5. 分析指定画面に戻る
-

何番ですか》？ 3

距離行列の大きさ》？

Fig. 5 画面への出力 4

[クラスター分析]

データ入力は次のどれですか？

-
1. データ・ファイルから入力
 2. 相関係数行列（キー・ボードから入力）
 3. 距離行列（同上）
 4. 平方距離行列（同上）
 5. 分析指定画面に戻る
-

何番ですか》？ 3

距離行列の大きさ》？ 1 6

DS (1, 1) 》？ 0
 DS (1, 2) 》？ 4
 DS (2, 2) 》？ 0
 DS (1, 3) 》？ 1
 DS (2, 3) 》？ 1
 DS (3, 3) 》？ 0
 DS (1, 4) 》？ 3
 DS (2, 4) 》？ 3
 DS (3, 4) 》？ 2
 DS (4, 4) 》？ 0
 DS (1, 5) 》？ 2
 DS (2, 5) 》？ 2
 DS (3, 5) 》？

Fig. 6 画面への出力 5

本事例では連想項目数は16であるから、16を入力してリターン・キーを押すと、画面はFig.6に変わるので、距離行列の行を横に追ってデータを入力してリターン・キーを押すのを繰り返す。

最後の行の

DS (16, 16) 》？

に、0を入力してリターン・キーを押すと、画面はFig.7 に変わる。

6番のワード法を選択するので、6を入力してリターン・キーを押す。画面はFig.8 に

合併後の距離の計算の方法

1. 最近隣法
 2. 最遠隣法
 3. メジアン法
 4. 群平均法
 5. 重心法
 6. ウォード法
 7. データの指定画面に戻る
-

何番ですか》？

Fig. 7 画面への出力6

合併後の距離の計算の方法

1. 最近隣法
 2. 最遠隣法
 3. メジアン法
 4. 群平均法
 5. 重心法
 6. ウォード法
 7. データの指定画面に戻る
-

何番ですか》？6

結果をプリンターに出力しますか？[1. はい（他：いいえ）]

Fig. 8 画面への出力7

変わる。

1を入力してリターン・キーを押すと、クラスター併合のステップの距離の表が出力される。その下の行に、

デンドログラムを出力します。どれかキーを押して下さい。

と表示される。キーを押すと、プリンターにデンドログラムが出力される。結果はFig.9のようになる。

デンドログラムを複数入手したいときは、左下に表示された

他の方法で分析しますか? : 1. はい 2. いいえ

で、1を選択するのを繰り返す。必要部数を確保できたら、2を選択する。

プリンターへ直接出力しないで、フロッピー・ディスクかハード・ディスクに一度セーブして、文書作成ソフトなどで読み取り、図中に連想反応を記入する方法もある。

[被験者による解釈の方法]

析出されたデンドログラムの余白部分に連想項目の内容を記入し、これをコピーして1部は被験者に呈示し、もう1部は実験者がみながら、以下の手順で被験者の解釈や新たに生じたイメージについて質問した。

まず、実験者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに各項目を上から読みあげ (Fig.10, 11参照)、項目群全体に共通するイメージやそれぞれの項目が併合された理由として考えられるもの、群全体が意味する内容の解釈について質問した。これを繰り返す。

Step	クラスタの併合	併合名	距離
1 >	1 + 3	3	1.00000
2 >	2 + 8	8	1.00000
3 >	4 + 7	7	1.00000
4 >	5 + 12	12	1.00000
5 >	6 + 13	13	1.00000
6 >	11 + 14	14	1.00000
7 >	3 + 9	9	1.73205
8 >	7 + 10	10	1.73205
9 >	12 + 15	15	2.23607
10 >	8 + 13	13	3.24037
11 >	9 + 10	10	5.91608
12 >	13 + 15	15	6.14701
13 >	10 + 16	16	6.75066
14 >	16 + 15	15	7.29971
15 >	15 + 14	14	8.93628

<< クラスタ分析 ー ー 基準 : ウォード法 >>

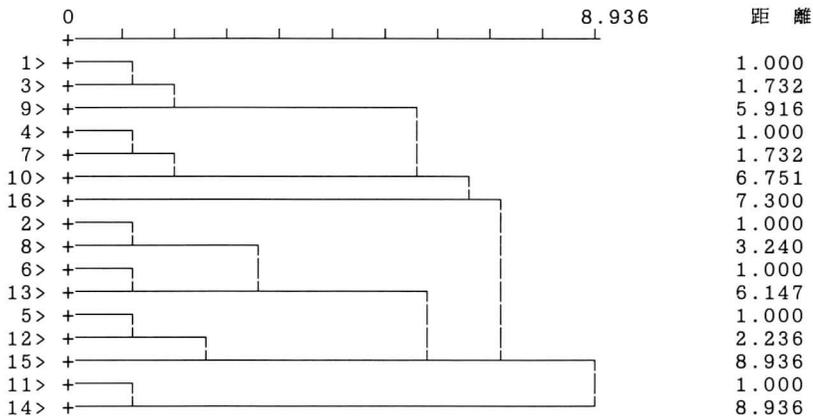


Fig. 9 プリンターへの出力結果

返して全ての群が終了した後、第1群と第2群、第1群と第3群、第2群と第3群というように、クラスタ間を比較させてイメージや解釈の異同を報告させた。この後さらに、全体についてのイメージや解釈について質問した。続いて、実験者として解釈しにくい個々の項目をとりあげて、個別のイメージや併合された理由について補足的に質問した。最後に、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらともいえない(0)のいずれに該当するかを回答させた (Fig.12 の連想項目の後ろに付加された () 内の符合を参照)。

結果と考察

<被験者によるクラスタのイメージと解釈> 以下の(Q:)は、実験者による質問部分。テープに録音しておらず、一部は文字記録もされていないので、記憶をたどりながら再

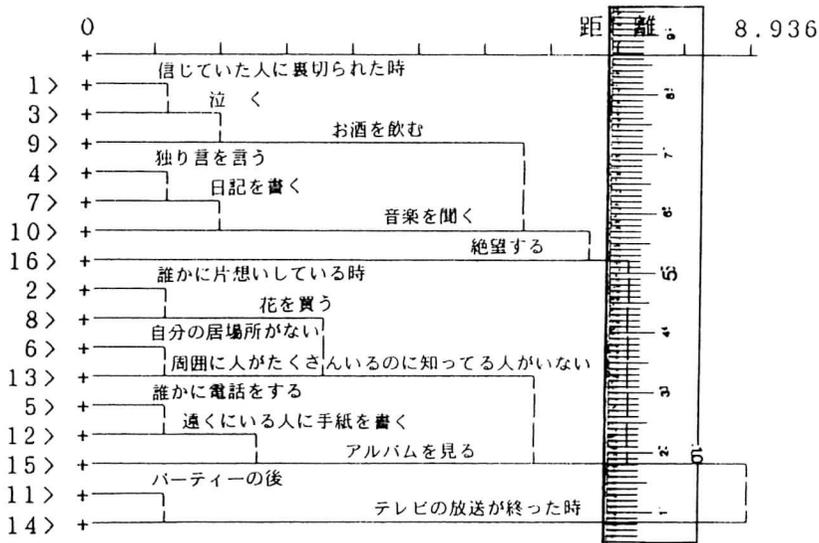


Fig. 10 実験者によるクラスター切断距離の探索

1) 左の数値は重要順位

構成したものである。

クラスター1は「信じていた人に裏切られた時」～「絶望する」までの7項目：(Q: それではコピーをご覧ください。上から見て、「信じていた人に裏切られた時」「泣く」「お酒を飲む」「独り言を言う」「日記を書く」「音楽を聞く」「絶望する」の1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, …7項目が1つのグループにまとまっているようですが、これらのグループからどんなイメージが浮かんできますか。またどんな内容でまとまっていると感じてくるでしょうか?) ……マイナスイメージというか、あの、とことん落ち込んでみる。で、あの、落ちるところまで落ちて、それで自分を、自分に、光を与える、与えようとする。そういうイメージです。暗いですね、イメージ的に。わりと過去の自分の傾向ですね。過去にあの、「信じていた人に裏切られた時」を指さして) この一番上の経験があって、そのときに、お酒は飲まなかったですけど、(残りの項目群を指さして) 他のこういうことをして、で孤独から離れようと、して、それが、今も癖になっている。ふーん! そういう感じです。(Q: まとまっているのは?) ……マイナス傾向っていうのですか? (Q: マイナスというのは?) あの、何とか這い上がろうってというよりは、落ち込むところまで落ち込んで、自分の殻に閉じ籠もって、孤独に、孤独から目をそらそうとしている。孤独を感じたときに、より孤独になろうとしている。そんな感じです。

クラスター2は「誰かに片思いしている時」～「アルバムを見る」までの7項目：(Q: さっきのグループの下になります、が、「誰かに片思いをしている時」「花を買う」「自分の居場所がない」「周囲に人がたくさんいるのに知っている人がいない」「誰かに電話をする」「遠くにいる人に手紙を書く」「アルバムを見る」の1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, …7項目が1つのグループにまとまっているようですが、これらの群からどんなイメージが湧きますか、またどんな理由によってまとまったという風に感じますか?) どちらかというプラス

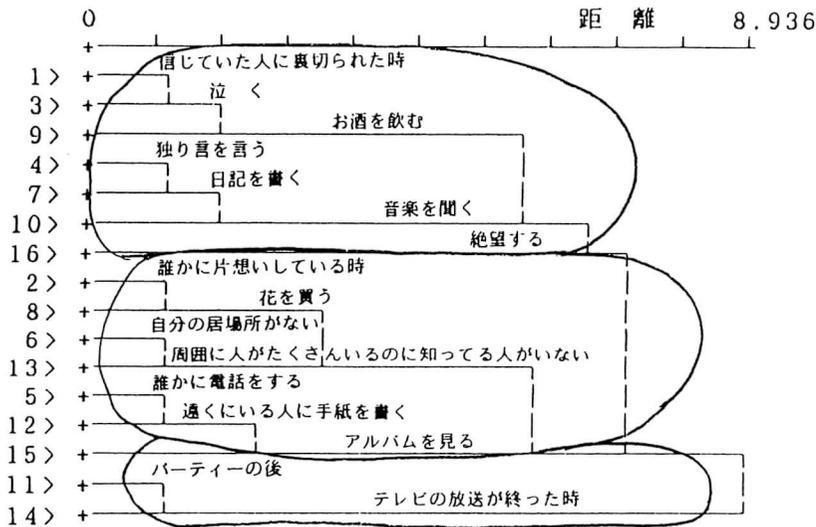


Fig. 11 実験者によるクラスター分割の原案

1) 左の数値は重要順位

の傾向で、自分で何とかしようというより、他の人や物に頼ってでも、這い上がろうとしている。さっきのにくらべると、今の私の状態の気がします。(Q:他にはどうでしょうか?) ん……、わりと、前向きかなと思います。(Q:まとまったのは?) プラス傾向で、現在の自分の状態です。さっきと違って、自分が孤独であるというのに、目をふさぐのではなくて、必ず何かかなと、信じて、いろいろなことをしてみようと頑張ってますね。自分が、一番生き生きとしたときの、自分の状態に、近づけようとしているように思えます。落ち込んでいるときに、花を買おうとか、電話をしようなどという気には、前はあまりならなかったんですが、自分が楽しかったときに、そういうことをしていたから、同じことをすれば、またあのときの自分になれるのではないかと思う。思います。そういうときに、そういうときの電話や手紙の内容は、悩みを相談するというより、楽しかったときの自分の姿を話す。いわゆる思い出話という感じになります。アルバムっていうのはまさにその象徴で、写真を撮る時っていうのは、たいてい笑っていますよね!? こんな自分もいるんだから、たまには落ち込むこともあるけれど、必ずもう一度こういう風に笑えと、自分を励まして、頑張れるように、花を買ったり、自分で自分にやさしくなろうとしているように思えます。落ち込んだときにいろいろ試してみようとする自分が見えます。はい!

クラスター3は「パーティーの後」「テレビの放送が終わった時」の2項目:(Q:今度は下のグループをご覧ください。「パーティーの後」と「テレビの放送が終わった時」が1つにまとまっているようですが、どんなイメージが湧いてきますか。またどんな理由でまとまったと感じますか?) これはプラスとかマイナスではなくて、おそらく、大学に入ってはじめて一人暮らしをして、はじめて自分一人という時間ができて、さみしいとか、悲しいとか、そう孤独ではなくて、「今ここに自分しかいないんだなー」って単純に孤独を認識している状態だと思います。悲しいとかではなく、どちらかという、「静かだなー」って思う程度で、

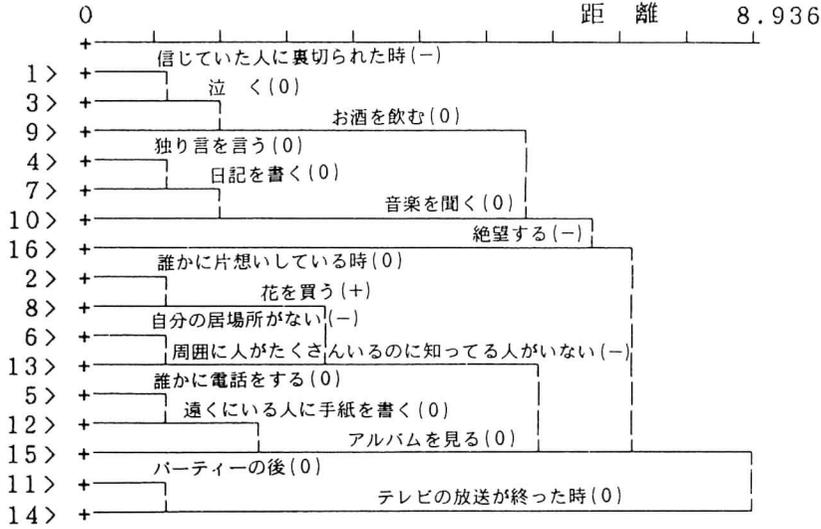


Fig. 12 連想項目と単独イメージが付加されたデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろの () 内の符号は単独でのイメージ

不思議なんです、突然部屋が広がったように思います。その場には確かに私一人しかなくて、孤独ではあるんですが、耳の中や目にはパーティやテレビの放送が鮮明に残っていて、あまり、(笑いながら)変な言い方ですが、孤独ぽくない孤独だと思います。

クラスター間の比較と全体について：《クラスター1と2の比較》(Q：今度は1番のグループ「信じていた人に裏切られた時」「泣く」「お酒を飲む」「独り言を言う」「日記を書く」「音楽を聞く」「絶望する」と、2番のグループ「誰かに片思いをしている時」「花を買う」「自分の居場所がない」「周囲に人がたくさんいるのを知っている人がいない」「誰かに電話をする」「遠くにいる人に手紙を書く」「アルバムを見る」とを比べてみて下さい。どんなところが同じで、どんなところが違っているでしょうか？ 比較してみてください。) 決定的に違うのは2番は前向きに対処しようとしていて、1番はそうではないです。それから1番はずいぶん昔のことです。2番は今に近いんじゃないかなーと。ただ、1番の内容を今まったくしていないかというと、そういうわけではなくて、やはり過去のこういう癖を今もしているんですが、最後には前向きの姿勢にもって行こうという点で、過去と変わったんじゃないかと思います。

《クラスター2と3の比較》(Q：それでは、2番のグループと、3番のグループ「パーティーの後」「テレビの放送が終わった時」とを比べて下さい。どんなところが似ていて、どんなところが違っているでしょうか?) 決定的に違うことは、2番は精神的な孤独で、3番は言葉通りの単純な孤独だと思います。で2番は、孤独に対して対処しようとする自分の姿勢で、3番は別にどうにかしようとする孤独ではない。3番は、2番のようなことがあったときに、這い上がるための、材料になりつつある事柄じゃないかと思います。(Q：その他にはどうでしょうか?) そんなことです。

《クラスター1と3の比較》(Q：それでは今度は、1番と3番のグループを比べてみて

下さい。)これはまったく違う気持で、1番の私が、3番の私を羨ましがるぐらいのことではないかと思えます。3番の私は、多少むなしいと思うけど、そういうときに1番の私を思い返して、ちょっとほっとする、という感じです。(Q:他にはどうでしょうか?)3番の私は、孤独な自分を人ごとのように考えていて、1番の私は、それとは対照的です。(Q:対照的とは?)まるで落ち込んでいるのはこの世の中で自分一人だと思ひ、孤独なのは自分一人だと思ひ、他の人は3番の私も含めて、敵だとまで思ひそうですね。(Q:その他にはどうでしょうか?)3番の私は、1番の私を材料にして、楽しんでいる部分があるのではないかと思ひます。そんなところです。

《全体について》(Q:今度は、1番、2番、3番の全体を見たときにどんなイメージが浮かんでくるのでしょうか?)1番はさっきもいったように、「過去の自分、とくに何かがあったときの自分」。2番はわりと「現在の何かあったときの自分」。3番は「現在の普通の自分の状態」。関係ないことになってしまうかも知れないけど、何となく、癖とか、性格とか、よくやりがちなことっていうのは、落ち込んだときにした状態が、つまりやったことですね、が、今に癖とか、そういうものに出てくるのかなって思ひます。そう考えると、もしも今の自分に満足しているのならば、孤独とか絶望とか、そういう経験は、長い目で見ると、私にとってとても重要なものではないかと思ひます。(Q:他にはどうでしょうか?)あとは出て来ません。

補足質問:「信じていた人に裏切られた時」……(Q:1番上の「信じていた人に裏切られた時」というのはどれくらい前のことですか?)高校2年生ですね。「お酒を飲む」……

(Q:「お酒を飲む」からは、どんなイメージが浮かんできますか?)違う自分になろうとして、記憶がなくなるまで飲んでしまう。だいたい家ですね。で、ひとつ思ひるのは、このグループは過去のことといひましたが、昔は本当に一滴も飲めなくて、ただ飲んだら忘れられるのじゃないかなという憧れみたいなものでした。飲酒というの。「日記を書く」……

(Q:「日記を書く」というのからはどんなイメージが浮かんできますか?)わりと人の目を気にするタイプなんです、日記だけはどんな小さなことでも、自分に正直になって、それを読む自分がせめて落ち込んでいる自分の味方になってあげようと思ひて書いています。

「音楽を聞く」……(Q:「音楽を聞く」からはどんなイメージが浮かんできますか?)落ち込んでいるときは、とことん静かな曲を聞いて、しかも今の状態を歌っているようなものを聞いて、泣けるまで聞きますね。「花を買う」……(Q:「花を買う」というのは?)自分に買う。

<重要順位と+-イメージ>

重要順位の高い順にはぼ1/3までの項目をあげると、①信じていた人に裏切られた時、②誰かに片思ひしている時、③泣く、④独り言を言う、⑤誰かに電話をする、の5項目となった(Fig.12参照)。1・2位が孤独感を生起させる対人関係事態で、3~5位が対処行動である。1位の「信じていた人に裏切られた時」だけがマイナスで、他の4つはいずれも「0」項目である。全体を見ても、プラスが1、マイナスが4であり、「0」項目は11と全体の68.8%にも達している。孤独に対して、自己疎隔的あるいは自我防衛的傾向が相当に強いことが推量される。

<総合的解釈> クラスタ1:すべての孤独感の出発点となるのが、重要順第1位の、高

校2年生のときの「信じていた人に裏切られた」体験である。それは、孤独をもたらした現実を直視して立ち直るのではなく、自分の殻に閉じこもり、さらに強い孤独感に溺れて孤独な自己を直視することから逃れようとするものであった。落ちる所までとことん落ち込むことによってしか救われないと感じ、破滅的な自己破壊へと向かうことになった。「泣き」ながら、「お酒を飲む（当時は実際に飲むまでには至らないが）」ことで意識を失い、人格転換したいと望んでいた。「独り言を言い」、落ち込んでいる自分を「日記に書く」、日記を読む自分自身だけが唯一の理解者であり、慰撫者であった。そして孤独を訴える「音楽を聞く」ことで、「絶望する」ほどの孤独感に浸っていた。これらは、裏切った相手へと向かうべき敵意や攻撃が逆に自己へと向かう自傷行為として、また自虐的に強められた孤独感に溺れることで現実から逃れようとする自我防衛的行為として解釈することができよう。このクラスターは、＜過去の人間不信体験と孤独感への耽溺＞と名づけることができよう。

クラスター2：このクラスターは、現在における孤独感の生起条件と対処行動から構成されている。「誰かに片想いをしている時」「自分の居場所がない」「周囲に人がたくさんいるのに知っている人がいない」ときに孤独を感じる。現在でも、過去に常用された自我防衛的な孤独への耽溺が消失しておらず、過去には望んでいただけであった「記憶がなくなるまで酒を飲んでしまう」という飲酒行動が習慣化している。過去に負った心的外傷が癒えていないことも推測される。しかしながら、自分で何とかしようというより、他の人や物に頼ってでも、這い上がろうとする。過去と違って、自分が孤独であるというのに目を塞ぐのではなく、必ず何かかなと信じていろいろなことをしてみようと頑張っている。過去に楽しかったことをすることで、肯定的な自己イメージを強化しようとする。唯一のプラスイメージである、自分に「花を買う」。楽しかった思いで話を交換するために、「誰かに電話をする」「遠くにいる人に手紙を書く」。楽しかった昔の自分を思い出すために、笑って写っている写真のとじられた「アルバムを見る」。そこでは、自分を励まして、自分で自分にやさしくなろうとしているように感じられる。自己受容の行動の登場である。＜自己受容と孤独感への対処行動＞のクラスターであると解釈できよう。

クラスター3：さみしいとか悲しいとかではなく、今ここに「自分しかいなんだな」と単純に孤独を認識し、「静かだな」と思うとき突然部屋が広がったように感じる。そして、「パーティの後」「テレビの放送が終わった時」なのに、それらの場面が目や耳に鮮明に残っている。孤独ぼくなく孤独が感じられている。ここからは、孤独の無意識的な受容と自己拡大感、他者と交流する自己、他者（存在の）受容が読みとれる。そこで、＜他者受容を伴う孤独感イメージの出現＞として命名することができよう。

全体として：全体の構造をクラスター間の関係としてみると、＜過去の人間不信体験と孤独感への耽溺＞→＜自己受容と孤独感への対処行動＞→＜他者受容を伴う孤独感イメージの出現＞というように図式化できよう。この流れは、「過去」→「現在」への時間的推移として、また「自己否定」→「自己受容」→「他者受容」の受容様式の変化としての、2側面を包含するものである。強烈な人間不信体験による孤独感が出現した点は、臨床心理学的にも興味深いものである。

ところで、本被験者においては、4年以前（大学入学前の浪人経験の有無については聴取していないので不明）の人間不信の体験に由来する、文字通り長期的な孤独感と現在の短期

的な孤独感の2つの要素が同時に作用している。そして長期的孤独感が短期的孤独感に大きな影響を及ぼしていることは明白である。また、強い人間不信による孤独感が生じている場合には、他者への不信ゆえに、対人交流という対処機制が利用されないことを示唆している。さらに、少なくとも、自我崩壊の危機に直面するような孤独感が生じるときには、自我防衛的に孤独感に耽溺する可能性のあることが示された。これらの知見は、“ここ2週間の状態” “ここ1年間の状態”を聴取した集団データによって分析すること(諸井, 1989)によっては、得られないであろう。過去の強烈な体験が現在まで尾を引いて孤独感を生じるようなケースは大量には確保できないであろうし、それぞれの個人の体験内容が異なると考えられるからである。集団データによる研究と対置するもの、補完するものとして、個人別構造分析の価値が確認されたといえよう。

おわりに

以上の孤独感の他にも、多種多様な対象についてのPAC分析が試みられている。興味を持たれた方のために、引用文献に続いて、筆者による「PAC分析研究業績リスト」を掲載しておく。

なお、本論文での知見や考察は、以下の方々(研究会)との出会いとご支援によるところが大きい。心よりお礼を申し上げたい。

実験に参加した多くの被験者の方々、札幌・仙台・山形・東京からそれぞれ個別に筆者の勤務先まで訪ねて来て宿泊しながらワークショップを受けた6人の研究者たち、仙台・東京・名古屋・久留米(九州)の各種研究会、沖縄交流分析研究会、琉球大学集中講義「学級集団心理学」の受講生、琉球大学公開講座受講者。

引用文献

- 池見 陽 1995 心のメッセージを聴く：実感が語る心理学 講談社
- 伊藤隆二 1996 展望／教育心理学の思想と方法の視座：「人間の本質と教育」の心理学を求めて 教育心理学年報35, 127-136.
- 諸井克英 1989 大学生における孤独感と対処方略 実験社会心理学研究, 29, 141-151.
- 内藤哲雄 1993a 個人別態度構造の分析について 人文科学論集(信州大学人文学部), 27, 43-69.
- 内藤哲雄 1993b ストレスの個人別構造分析 日本心理学会第57回大会発表論文集, 187.
- 内藤哲雄 1993c 学級風土の事例記述的クラスター分析 実験社会心理学研究, 33, 111-121.
- 内藤哲雄 1994 性の欲求と行動の個人別態度構造分析 実験社会心理学研究, 34, 129-140.
- 内藤哲雄 1995 個人別態度構造に関する研究 平成6年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書, 1-70.
- 内藤哲雄 1996 在日韓国人の「在日」に関するPAC分析 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 332-333.
- ターナー J.C. 蘭 千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美(訳) 社会集団の再発見：自己カテゴリー化理論 誠信書房(Turner, J.C. 1987 *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Basil Blackwell.)

- 渡辺文夫・関 光準・才田いづみ・内藤哲雄・安 龍洙・李 舜焜・河先俊子・佐藤友則・高橋世津・曹 永湖・藤田祐子・目黒秋子 1994 日本語教育と認知的変容の研究Ⅰ：韓国入学者と日本人実習生の授業観についての事例的研究 日本語教育方法研究会誌, 1, 3, 32-33.
- 吉田章宏 1990 展望／「教育心理学」に期待する一つの遠未来像：僻地にある「迷える子羊」から見たその眺望 教育心理学年報, 29, 142-153.

PAC分析研究業績リスト（筆者によるもの：1996年11月現在）

（著書）

- 内藤哲雄 1994 個人特有の態度構造を測る 浅井邦二編著 こころの測定法 第2部 全体としての人間を測る 実務教育出版, 172-193.

（論文）

- 内藤哲雄 1993 個人別態度構造の分析について 人文科学論集（信州大学人文学部）第27号, 43-69.
- 内藤哲雄 1993 学級風土の事例記述的クラスター分析 実験社会心理学研究, 33, 111-121.
- 内藤哲雄 1994 内陸地域「信州」のイメージの個人別構造分析（信州大学人文学部特定研究班）内陸地域文化の人文科学的研究Ⅰ（特定研究中間報告書）, 27-47.
- 内藤哲雄 1994 性の欲求と行動の個人別態度構造分析 実験社会心理学研究, 34, 129-140.
- 内藤哲雄 1995 「信州人の人間関係」の個人別イメージ構造分析（信州大学人文学部特定研究班）内陸地域文化の人文科学的研究（特定研究最終報告書）, 5-26.
- 内藤哲雄 1995 個人別態度構造に関する研究 平成6年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書, 1-70.

（口頭発表論文）

- 内藤哲雄 1991 同性・異性への好意と嫌悪 日本社会心理学会第32回大会発表論文集, 98-101.
- 内藤哲雄 1991 個人別態度構造の分析：過去・現在・将来での重要項目による 日本心理学会第55回大会発表論文集, 732.
- 内藤哲雄 1992 家族への事例的態度構造分析 日本心理学会第56回大会発表論文集, 234.
- 内藤哲雄 1992 学級風土の事例記述的構造分析 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 270.
- 内藤哲雄・田中令子・松本あつ子・中嶋まさ子・小日向由紀・湯本敦子・池田紀美子・田畑久美子・一ノ瀬文穂・上条陽子・杉谷留美子 1992 出産・育児に関する不安や悩みの個人別構造分析 日本母性衛生学会第33回学術集会抄録集, 112.
- 内藤哲雄 1992 政党への個人別態度構造分析 日本社会心理学会第33回大会発表論文集, 254-257.
- 内藤哲雄 1993 ストレスの個人別構造分析 日本心理学会第57回大会発表論文集, 187.
- 内藤哲雄 1993 所属集団における人間関係の個人別構造分析 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 148.
- 内藤哲雄 1993 暗黙のパーソナリティ理論：やさしいの個人別構造分析 日本グループ・ダイナミックス学会第41回大会発表論文集, 46-49.
- 内藤哲雄 1993 職業への態度と変容の個人別構造分析 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 46-49.
- 内藤哲雄 1994 TAT 図版による個人別イメージ構造分析 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 206.

- 渡辺文夫・関 光準・才田いずみ・内藤哲雄・安 龍洙・李 舜焜・河先俊子・佐藤友則・高橋世津・曹 永湖・藤田祐子・目黒秋子 1994 日本語教育と認知的変容の研究Ⅰ：韓国人学習者と日本人実習生の授業観についての事例的研究 日本語教育方法研究会誌, 1, 3, 32-33.
- 内藤哲雄 1994 孤独感の個人別構造分析 日本心理学会第58回大会発表論文集, 96.
- 内藤哲雄 1994 内陸地域「信州」のイメージの個人別構造分析 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 130-133.
- 内藤哲雄 1994 性の欲求と行動の個人別構造分析 日本グループ・ダイナミクス学会第42回大会発表論文集, 22-25.
- 内藤哲雄 1995 信州人の人間関係の個人別イメージ構造分析 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 328-331.
- 渡辺文夫・安 龍洙・内藤哲雄 1995 韓国人日本語学習者と日本人教師の授業観の比較 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 360-363.
- 内藤哲雄 1995 劣等感の個人別構造分析 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 75.
- 内藤哲雄 1995 態度・イメージの個人別構造分析(小講演) 日本心理学会第59回大会発表論文集, S80.
- 内藤哲雄 1995 化粧についての個人別態度構造分析 日本心理学会第59回大会発表論文集, 145.
- 内藤哲雄 1995 男性における性の欲求と行動の個人別態度構造分析 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集, 18-21.
- 内藤哲雄 1996 家族イメージの個人別構造分析 日本心理学会第60回大会発表論文集, 225.
- 内藤哲雄 1996 在日韓国人の「在日」に関する PAC 分析 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 332-333.
- 内藤哲雄・島袋恒男 1996 教育実習の PAC 分析(1) 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 384.
- 島袋恒男・内藤哲雄 1996 教育実習の PAC 分析(2) 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 385.